

高知県吾川郡春野町

王子・西ノ芝遺跡の調査

春野拡幅埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

高知県吾川郡春野町

王子・西ノ芝遺跡

国道56号線春野バイパス拡張工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992・3

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

序

(財)高知県文化財団が埋蔵文化財センターを開設して1年が経過致しました。県下の発掘調査等により迅速に対応していくべく取り組みを図ったこの1年間は、実に早く時間が経過したように存じます。ふりかえれば、県下各地での発掘調査の進展に加えて、円滑な調査を進めるうえでの調査員増員等の体制整備や事務処理方法など、検討を講じる必要性のある課題も増加しています。

県下の埋蔵文化財保護の中核施設となるべく、今後共鋭意、調査・研究に精進して参りたいと存じますが、後進の徒ゆえまだまだ微力の段階であります。

先輩都道府県に助言を受けにうかがう機会もこれから多いこととは存じますが、どうか御指導・ご鞭撻方いただきますようよろしくお願い申し上げます。

本書は、国道56号線道路改良工事(春野バイパス建設)に伴う王子・西ノ芝遺跡の発掘調査報告書であります。調査に際して御配意いただいた建設省土佐国道工事事務所を始め、春野町教育委員会並びに地元関係者の皆様方に厚くお礼申し上げますと共に、本書が文化財保護の一助ともなれば幸いに存じます。

平成4年3月31日

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター
所長 小橋 一 民

例 言

1. 本書は、国道56号線道路改良工事（春野バイパス建設）に伴い、建設省土佐国道工事事務所の委託を受けて高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成3年度に実施した王子遺跡・西ノ芝遺跡の発掘調査報告書である。

2. 王子遺跡は、高知県吾川郡春野町弘岡中字王子に、また西ノ芝遺跡は同町弘岡上字西ノ芝に所在する。

今回の調査区は弘岡中字王子に1区（500㎡）を、弘岡上字西ノ芝に1区（100㎡）を設定した。

なお、試掘調査に関しては春野町弘岡下から弘岡上にかけて20ヶ所の試掘坑（TR1～20）を設定し遺跡所在の有無の確認を施した（146㎡）。

3. 試掘調査は、平成2年10月22日～11月13日の間に実施し、その結果に基づいて本発掘調査を平成3年12月18日～平成4年3月23日の間に実施した。また調査後、整理作業を行った。

調査番号は、91-32HBである。

4. 調査体制は以下のとおりである。 （調査担当地）

| | | | |
|---------|-------|----------------------------|----------|
| （1）調査員 | 山本 哲也 | 高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第1係長 | （西ノ芝遺跡他） |
| | 江戸 秀輝 | 同 調査員 | （王子遺跡） |
| | 曾我 貴行 | 同 調査員 | （試掘調査） |
| | 坂本 憲昭 | 同 調査員 | （王子遺跡） |
| | 吉成 省三 | 同 調査員 | （王子遺跡） |
| （2）総務担当 | 三浦 康寛 | 同 主事 | |

5. 本書の編集は、担当調査員の協力を得て山本が行い、執筆は以下のとおり分担した。

| | | | |
|-------------------|----|--------------|----|
| 第Ⅰ・Ⅲ（西ノ芝遺跡の調査）・Ⅳ章 | 山本 | 第Ⅱ章 | 坂本 |
| 第Ⅲ章（試掘調査） | 曾我 | 第Ⅲ章（王子遺跡の調査） | 江戸 |

6. 整理作業・報告書作成等においては、下記の方々の協力を得た。

記して感謝の意を表したい（文中敬称略）。

山中美代子 山本裕美子 大原喜子 中西純子 宮地佐枝 白木由里 矢野 雅

7. 発掘調査においては、地元弘岡地区を始め春野町教育委員会、建設省土佐国道工事事務所に全面的なご協力をいただいた。また、現地作業員の各位、中山朋之、国沢孝水、百田進一の各諸氏にはいろいろとご協力・ご援助をいただいた。文末ではあるが、心からお礼申し上げたい。

本文目次

| | | |
|-----|------------|----|
| 第Ⅰ章 | 調査に至る契機と経過 | 1 |
| 1. | 調査の契機 | 1 |
| 2. | 調査の経過 | 1 |
| 第Ⅱ章 | 地理的歴史的環境 | 3 |
| 1. | 地理的環境 | 3 |
| 2. | 歴史的環境 | 3 |
| 第Ⅲ章 | 調査の概要 | 5 |
| | 試掘調査 | 5 |
| 1. | 調査の概要 | |
| 2. | 調査の方法 | |
| 3. | 調査成果 | |
| | 王子遺跡の調査 | 11 |
| 1. | 調査の方法 | |
| 2. | 基本層序 | |
| 3. | 検出遺構と出土遺物 | |
| | 西ノ芝遺跡の調査 | 23 |
| 1. | 調査の方法 | |
| 2. | 基本層序 | |
| 3. | 検出遺構と出土遺物 | |
| 第Ⅳ章 | まとめ | 29 |
| 1. | 遺構 | 29 |
| 2. | 遺物 | 30 |

挿 図 目 次

- Fig. 1 調査地点位置図
- Fig. 2 周辺の遺跡分布図
- Fig. 3 試掘坑位置図 1 (TR1~10)
- Fig. 4 試掘坑位置図 2 (TR11~17)
- Fig. 5 試掘坑位置図 3 (TR18~20) ・ TR 13、19 土層断面図
- Fig. 6 TR 13 遺物出土状況図 (IV層) ・ 土層断面図
- Fig. 7 TR 13 (1~9) ・ TR 19 (10・11) 出土遺物
- Fig. 8 王子遺跡調査区配置図及び予備調査範囲図 (T1~7)
- Fig. 9 王子遺跡遺物出土状況平面図
- Fig. 10 王子遺跡 SD 1~5 ・ R 1 平面図
- Fig. 11 王子遺跡土層断面図
- Fig. 12 SD 5 土層断面図
- Fig. 13 R 1 土層断面図
- Fig. 14 西ノ芝遺跡調査区位置図
- Fig. 15 西ノ芝遺跡 TR 19 土層断面図
- Fig. 16 西ノ芝遺跡検出遺構平面図
- Fig. 17 SK 2 遺物出土状況図
- Fig. 18 西ノ芝遺跡 (SK 2・1~6) ・ 王子遺跡出土遺物 SD 1 (7~9)
SD 2 (10~22・30) ・ SD 3 (23・24) ・ SD 4 (25~29)
- Fig. 19 王子遺跡出土遺物 SD 3 (41・42) ・ SD 4 (31・40)
SD 5 (46)
- Fig. 20 王子遺跡出土遺物 SD 1 (48・49) ・ SD 5 (50~59)
R 1 (60~62)

表 1 : 試掘調査出土遺物観察表

図 版 目 次

- PL. 1 試掘調査風景 (TR 2・東から)
試掘調査風景 (TR 7・南から)
- PL. 2 試掘調査風景 (TR 13・北東から)
TR 13 遺物出土状況 (古式土師器・北から)
- PL. 3 試掘調査風景 (TR 19・南西から)
同上 (西から)
- PL. 4 TR 13 (1~7・9) 出土遺物
TR 19 (10・11) ♪
- PL. 5 王子遺跡調査風景 (南から)
同上 (予備調査)
- PL. 6 調査風景 (西から)
同上 (南から)
- PL. 7 調査風景 (北東から)
R 1 近景 (北東から)
- PL. 8 SD 1~4 検出状況 (南東から)
SD 5 検出状況 (北から)
- PL. 9 SD 3・4 (南東から)
R 1 南壁
- PL. 10 発掘区全景 (北東から)
完掘状況 (北東から)
- PL. 11 西ノ芝遺跡調査区遠景 (北西から)
同上 (南から)
- PL. 12 西ノ芝遺跡調査風景 (南から)
遺構検出状況 (北西から)
- PL. 13 SK 3・4 (西から)
完掘状況 (北西から)
- PL. 14 西ノ芝遺跡出土遺物 (SK 2)
- RL. 15 王子遺跡出土遺物 (SD 2~4)
- PL. 16 王子遺跡出土遺物 (SD 4・5)
- PL. 17 王子遺跡出土遺物 (SD 4・5)
- PL. 18 王子遺跡出土遺物 (SD 1・2・5、R 1)
- PL. 19 王子遺跡出土遺物 (SD 1・R 1)

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過

1. 調査の契機

国道56号線は、高知市から中村市・宿毛市方面に至る主要国道で、県中央部と西部を結ぶ重要な基幹道路である。春野町には、高知市朝倉から荒倉トンネルを経て町西北部を通過し、同町弘岡で主要地方道春野・赤岡線、主要地方道高知南環状線と合流したうえ（弘岡分岐）、仁淀川大橋から土佐市に通じている。主要道路であるが、近年の交通量の増大に伴い通行状況は飽和化を呈し、渋滞等の緩和や通行整理など道路交通網の整備促進が望まれていた。特に高知市との接合点となる荒倉トンネル側や主要地方道との分岐点周辺では渋滞の度合いが著しく、バイパス建設など抜本的な改善策の実現化が求められていた。

建設省四国地方建設局土佐国道工事事務所では、主要国道の交通網整備計画促進のなかで、高知市側の土佐道路整備事業に続き、荒倉トンネルから仁淀川大橋にかけての春野町域でのバイパス建設工事に着手し、平成2年度以降、用地取得及び部分工事作業を進めていた。

道路建設計画地については、既存資料での周知の埋蔵文化財包蔵地と直接重複するものはなかったが、春野町弘岡中御殿に後田遺跡（うしろだいせき・弥生時代等遺物散布地）が所在することや、昭和61年度から10ヶ年計画で実施している県下遺跡詳細分布調査事業での資料再整備に加えて、平成2・3年度に土佐・吾川ブロックの遺跡地図作成化が進められていることと連動し、事前の踏査と試掘調査を含む確認調査を講ずる必要性があった。

このため、高知県教育委員会（文化振興課埋蔵文化財班）では、土佐国道工事事務所・（財）高知県文化財団と数度の協議を実施し、試掘調査を建設省四国地方建設局から新設の（財）高知県文化財団（埋蔵文化財センター開設準備室）が受託して実施する運びとなった（春野拡幅埋蔵文化財発掘調査事業）。

2. 調査の経過

試掘調査は、用地取得済の道路建設計画地について20ヶ所の確認調査区を設定し、平成2年10月22日～11月13日の間、トレンチ調査を実施した（総計146㎡）。また、同年10月22日～平成3年3月27日にかけては、整理作業を実施した。なお、平成2年8月6日には春野町弘岡中において、一部工事作業に伴う立会調査（2ヶ所のトレンチ調査・道路測点N0.161～160間）を行ったが、この範囲については遺跡の所在等は確認されなかった。

試掘調査の結果、春野町弘岡中字王子と同町弘岡上字西ノ芝において、遺跡の所在が確認され、工事に先立つ事前の本発掘調査が必要となった（遺跡全体面積800㎡）。

本発掘調査は、関係機関との協議の結果、（財）高知県文化財団（埋蔵文化財センター）が建設省四国地方建設局から受託して平成3年度に実施し、平成3年12月18日～平成4年3月23日の間、現地調査を行った（発掘調査面積600㎡）。また、整理作業は現地調査と並行して実施した。なお、調査した遺跡は、現地の土地の字名を冠して王子遺跡・西ノ芝遺跡とそれぞれ呼称することにした。遺跡の略記号は、91-32HBと91-33HBである。

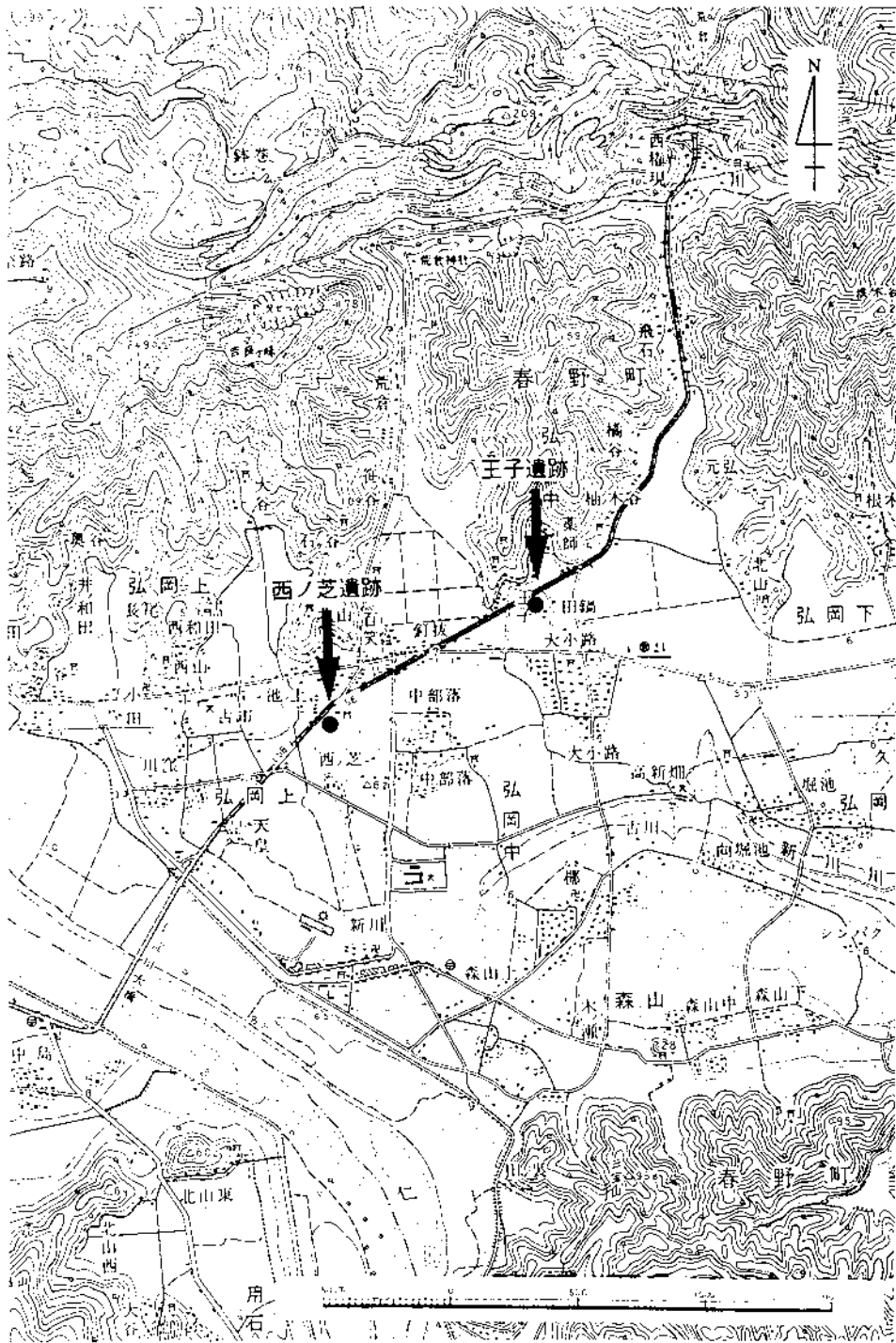


Fig1. 調査地点位置図

第Ⅱ章 地理的歴史的環境

1. 地理的環境

春野町は高知県のほぼ中央部に位置し、北側は県都である高知市と接し、西側は土佐市に、西北側は伊野町と接しており、南は太平洋に向かって面している。

春野町の地理的な環境を特徴付けているものとして、西端を南流する仁淀川・北側の高知市を分ける鷲尾山脈・南部に高森山につながる丘陵を挙げることができる。

仁淀川は霊峰石槌山にその源を発し、吾川郡の山間部を縫うように南流し、春野町で土佐湾に注ぐ。仁淀川は古来より度々氾濫を繰り返し、多くの分流を派生させ、また本流もその河床を幾たびも変化させながら春野町中央部の低地に肥沃な堆積平野である弘岡平野を形成した。

弘岡平野は、この仁淀川による堆積作用によって北側の鷲尾山脈と南側の丘陵の間の地溝性の低地が平野化されたもので、ボリング調査等の結果では砂礫層及び粘土層が旧後背湿地の部分では厚い堆積を示す。微高地である旧自然堤防や残丘性の丘陵には集落が立地している。

弘岡平野は肥沃な堆積地でありながら、微高地では水利が悪く水田耕作には適さず、また底湿地では排水の悪さから生産力が伸びなかった。この地の生産力を飛躍的に向上させたのは、近世に野中兼山による弘岡井筋の築造によってであった。

春野町北部に位置する鷲尾山脈は、標高300m程度の比較的低位の山脈であるが、高知平野と吾南地方を分け、古来より中村と結ぶ中村街道の荒倉越えは、交通の難所となっていた。しかし、昭和29年に荒倉隧道が開通し、現在国道56号線は高知県の主要幹線として年々交通量が増加し春野町が高知市の郊外化することの要因となっている。

2. 歴史的環境

春野町内には、縄文時代をはじめ中世城館まで数多くの遺跡が所在し、その歴史を明らかにしている。特に、同町中央部に広がる弘岡平野には、縄文時代から中世まで連続と続く遺跡である西分増井遺跡群や、山根・石屋敷遺跡があり、仁淀川河口流域の集落の発生、発展を解明する上で重要な遺跡となっている。

西分増井遺跡群は、縄文時代の遺構が検出されてその集落の存在が推定され、高知県中央部の沖積平野に縄文遺跡が存在する証明となった。また、弥生時代では前期の竪穴住居跡が検出され、仁淀川流域の弥生文化の伝播、発展を知る上で重要な手掛りを提供した。注目すべき事としては、県下で始めて方形周溝墓が確認され、高知県下の弥生時代の墓制及び古墳への移行を考えるうえで貴重な資料となった。同遺跡のすぐ西側には、古墳時代前期の集落である馬場末遺跡が所在する。

また、春野町には中世の城館跡が多く所在している。近年発掘調査が行われ現在も継続して調査が行われて多大な成果を挙げつつある芳原城跡や雀ヶ森城跡等が所在し、中世から戦国時代にかけて春野町周辺での人々の活発な活動の跡を現代に伝えている。特に吉良城跡は中世土佐の七守護人の一人として数えられた吉良氏の城として著名で、春野町教育委員会によって五

次にわたって調査されており、中世の城館を知るうえで貴重な資料を提供している。吉良城には、城下町として形成されたと考えられる弘岡市町の存在が推定されており、春野町の中世の姿を知る資料となっている。

この弘岡市町に隣接して王子遺跡と西ノ芝遺跡は所在しており、遺跡の性格を知るうえで吉良城と弘岡市町は重要な位置をしめている。

(参考文献)

『春野町史』1976 春野町

出原 恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』1990 春野町教育委員会

小林 健太郎『戦国城下町の研究』1985 大明堂

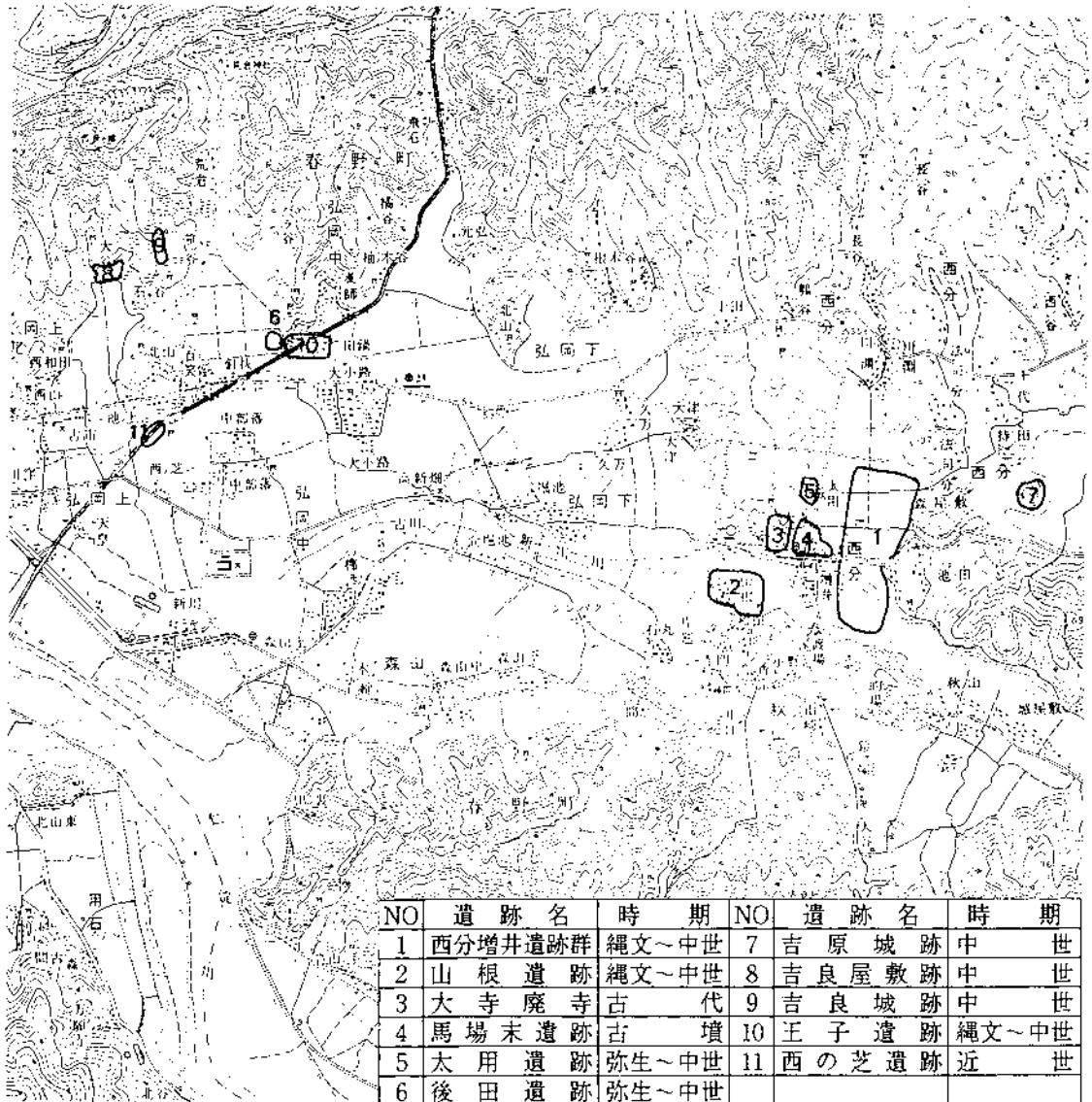


Fig 2. 周辺の遺跡分布図

第Ⅲ章 調査の概要

試掘調査

1. 調査の概要

国道56号線春野バイパス拡張工事に際し、工事計画路線上に位置する高知県吾川郡春野町弘岡下～弘岡上地区について、平成2年度に事前の確認調査を実施した。王子遺跡並びに西ノ芝遺跡は、その際に新たに発見された遺跡である。調査は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター開設準備室が受託し、これを実施した。発掘調査期間は平成2年10月22日～11月13日であり、発掘調査面積は146㎡である。

2. 調査の方法

春野町弘岡下から弘岡上までの間に20箇所の試掘坑（TR1～TR20）を任意に設定し、遺物包含層及び遺構等の確認をおこなった。各試掘坑の大きさは2×3mを基本としたが、調査の必要に応じて試掘坑の拡張をおこなったため、調査面積の総計は146㎡であった。

試掘坑の掘り下げには重機を使用し、遺構及び遺物包含層の検出及び掘り下げは人力でおこなった。遺構・遺物包含層の検出された試掘坑については遺構平面図及び土層断面図（各縮尺1/20）の記録をおこない、その他の試掘坑についても土層堆積状況の記録をおこなった。

3. 調査成果（Fig1・3～5）

今次の調査区間は、北東端から南西端まで約700mの延長距離を有する。そして、調査区間の北東部分では植物遺体を多分に含む腐植土層もしくは粘質土層の堆積が特徴的であり、一方調査区間の南西部分では植物遺体を含まない粘土層・粘砂土層の堆積が顕著である。遺跡の確認できたのは後者の南西部分であった。調査の結果、TR1～12・14～18・20に関しては明確な遺跡の存在は認められなかったが、TR13・19においては古墳時代の遺物包含層、及び近世の遺構を確認した。以下、TR13・19の調査成果をそれぞれ記述する。

（1）TR13（Fig5・6・8）

現地地表下2.2mまでの確認をおこない、地表下1.2mにある第Ⅳ層から古墳時代中期の土師器等約300点を検出した。明確な攪乱は認められず、出土遺物はほぼ一時期のものと捉えることができよう。この内、土師器（壺・甕・高杯）9点を図示することができた（Fig.7）。詳細は遺物観察表のとおりである。

（2）TR19（Fig5・14・16）

現地地表下1.3mまでの確認をおこない、地表下0.6mにおいて深さ50cm以上を有する溝状の遺構（SX）を確認した。確認できたのは溝状遺構の東側の肩部であり、相対する西側の立ち上がりは未確認である。溝状遺構及び埋土の直上層からは近世の陶磁器・土師質土器片がまとまって出土しており、遺構の埋没年代を示すものと考えられる。出土遺物は細片が多いが、陶磁器片2点を図示することができた（Fig.7）。詳細については遺物観察表のとおりである。

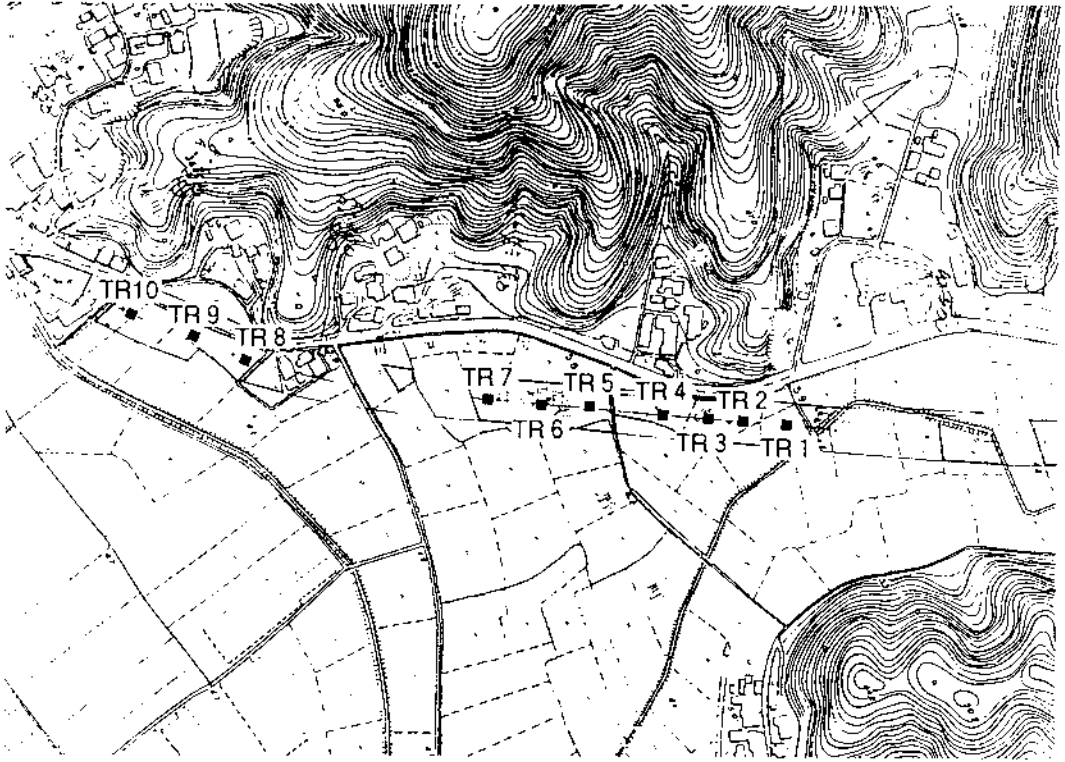


Fig 3. 試掘坑位置図 1

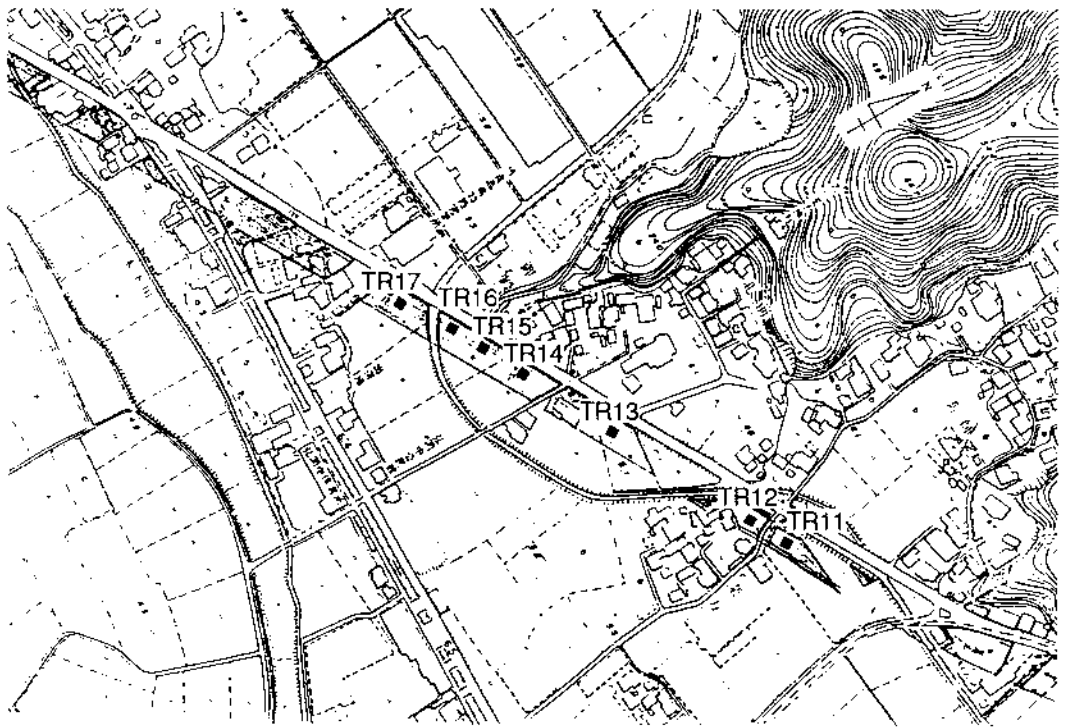
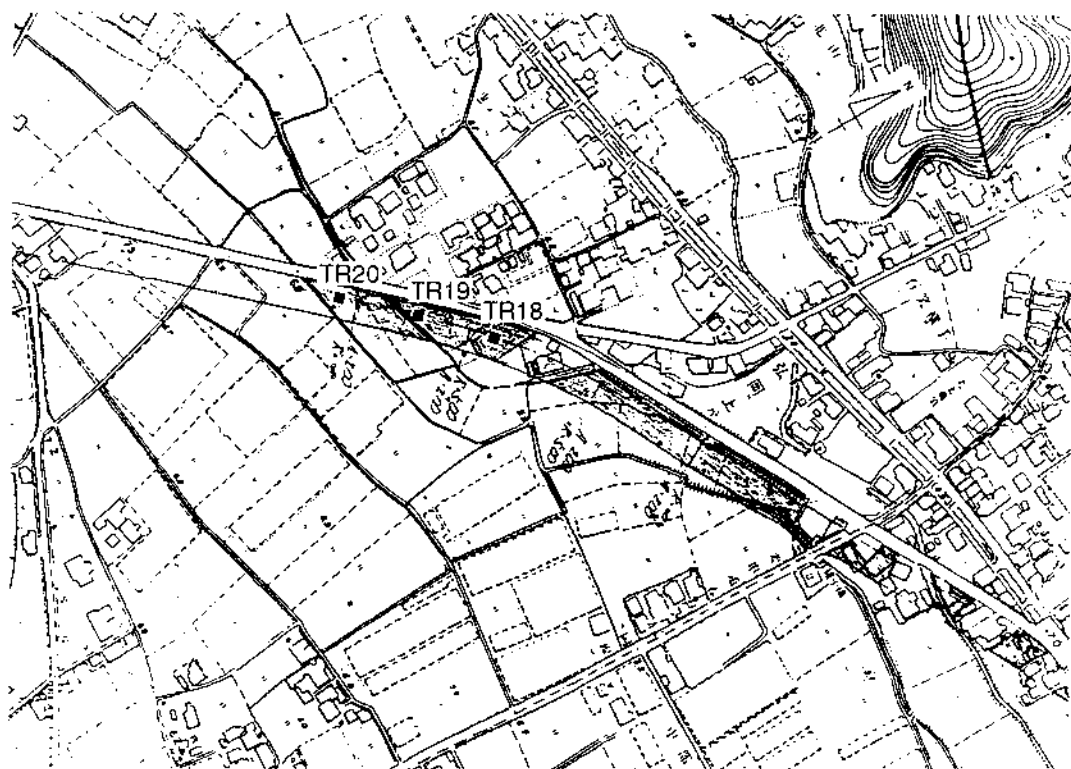


Fig 4. 試掘坑位置図 2



試掘坑位置圖 3

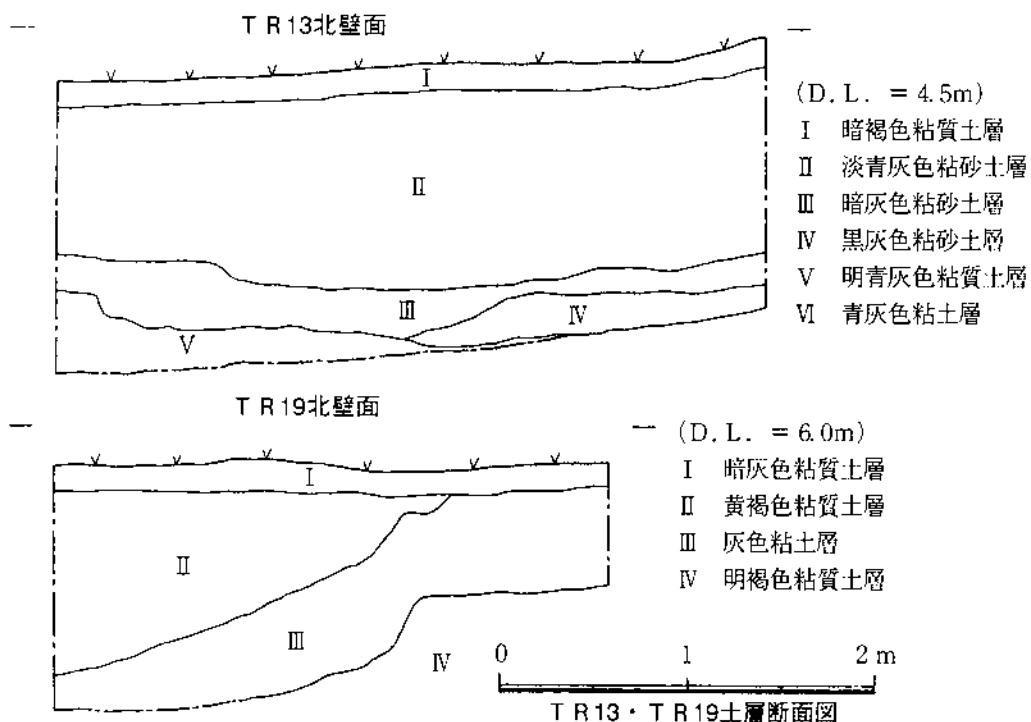
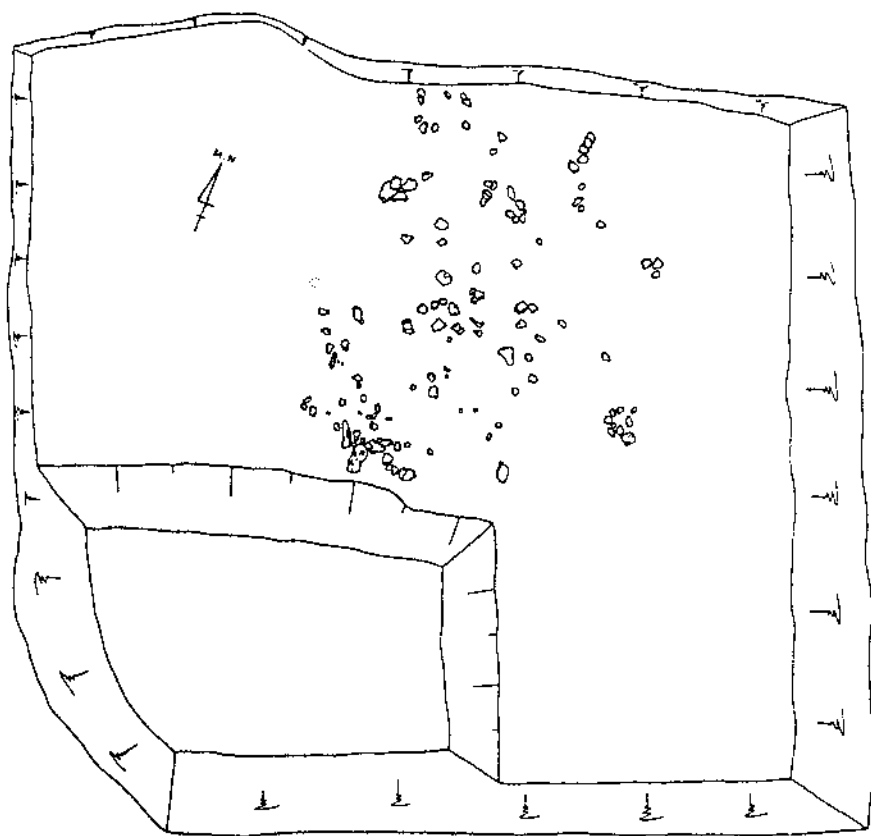
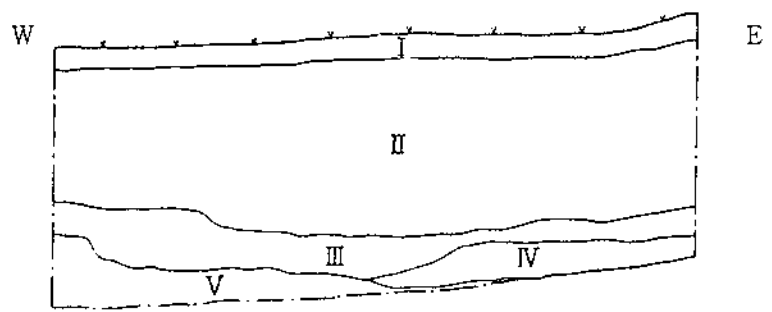


Fig 5. 試掘坑位置圖・T R 13、19土層断面図



4.5 m



- I 暗褐色粘質土層
- II 淡青灰色粘砂土層
- III 暗灰色粘砂土層
- IV 黑灰色粘砂土層 (包含層)
- V 明青灰色粘質土層
- VI 青灰色粘土層

Fig 6. T R 13遺物出土狀況圖 (IV層) · 土壤断面図

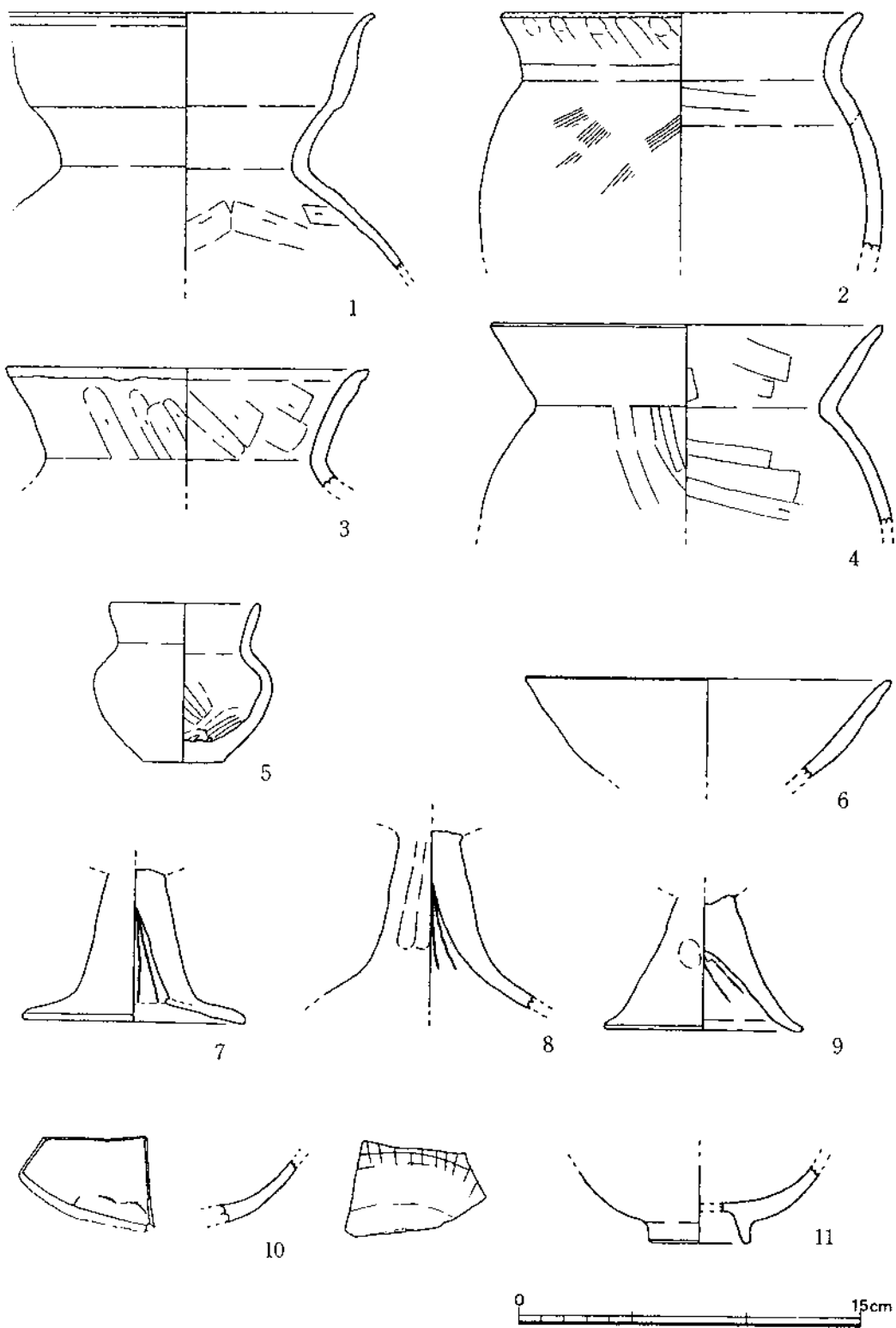


Fig 7. TR13 (1~9)・TR19 (10・11) 出土遺物

表1 試掘調査出土遺物観察表

| 挿図番号 | 遺構番号 | 器種 | 口径 法量 (cm) 器高 胴径 底径 | 形態・文様 | 手法 | 備考 |
|------------|-----------------------|----------|------------------------------------|---|--|----------------------------|
| Fig. -1 | TR13 IV層 | 土師器 壺 | 16.7 (11.4) | 口縁部から胴上部が残存。体部は内弯して立ち上がり、頸部で「く」の字状に屈曲して口縁部は外上方に伸びる。口縁部はさらに屈曲して上外方に立ち上がる二重口縁を呈し、端部は外弯して再び外方に伸び、丸くおさめる。 | 胴部～頸部外面は横方向のナデ。内面は、胴部はヘラケズリ・ナデ調整、頸部以上はナデ。口縁部は内外面ともナデ調整。 | |
| 〃 -2 | 〃 〃 | 〃 甕 | 16.0 (10.6) 17.7 | 胴部下半は欠損。体部は緩く内弯して立ち上がり、頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外弯して上外方に伸び、端部は丸くおさめる。 | 胴部は、外面がハケ、内面がナデ調整。口縁部は、外面がナデ・指頭押圧、内面がナデ調整。 | 外面には煤の付着が顕著である。 |
| 〃 -3 | 〃 〃 | 〃 〃 | 16.0 (5.2) | 口縁部のみ残存。頸部は稜をなして屈曲し、口縁部は緩く外弯して上外方に立ち上がり、端部は尖り、端部折り返しにより外面がやや肥厚する。 | 外面は縦方向のナデ調整。内面はナデ・指頭押圧によっている。 | 〃 |
| 〃 -4 | 〃 〃 | 〃 〃 | 17.3 8.7 | 口縁部～胴上部が残存。体部は緩やかに内弯して立ち上がり、頸部は鋭く屈曲し、口縁部は直線的に外上方に伸び、端部は丸くおさめる。 | 胴部は、外面が縦方向のナデ、内面がヘラケズリ。口縁部外面は煤の付着が顕著で調整不明、内面はヘラケズリ・ナデ調整。 | 〃 |
| 〃 -5 | 〃 〃 | 〃 壺 | 6.5 7.0 7.7 3.5 | 底部は平底で、体部は内弯して立ち上がり、胴上部の張るタマネギ状の形態を呈し、頸部で緩く屈曲して、口縁部は上外方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。 | 内外面ともに、ナデ・指頭押圧によっている。 | |
| 〃 -6 | 〃 〃 | 〃 高坏 | 16.0 (4.3) | 坏部のみ残存。体部は内弯ぎみに外上方に立ち上がり、端部は直線的に外上方に伸び、丸くおさめる。 | 外面は横方向のナデ調整。内面はナデ調整。 | 胎土に径1mm以下の赤褐色のシャームットを多く含む。 |
| 〃 -7 | 〃 〃 | 〃 〃 | — (6.7) 9.8 | 坏部は欠損。脚部は中空で、付け根から直線的に下外方に下り、裾部で屈曲して大きく開き、端部は丸くおさめる。 | 脚部外面はナデ調整、内面には絞り目が残る。裾部は内外面ともナデ調整。 | |
| 〃 -8 | 〃 〃 | 〃 〃 | — (6.7) | 坏部・裾部は欠損。脚部は中空で、付け根から直線的に下外方に下り、裾部は外弯して大きく開く。脚部中位はエンタシス状に肥大する。 | 端部外面は縦方向のヘラ状工具によるナデ調整、内面には絞り目が残る。裾部は内外面ともにナデ調整。 | |
| 〃 -9 | 〃 〃 | 〃 〃 | — (5.9) 8.7 | 坏部は欠損。脚部は中空で、付け根からやや外弯ぎみに外下方へ下り、裾部は内面で一段をなし、端部は丸くおさめる。 | 外面はナデ・指頭押圧によっており、内面はナデ及びヘラ状工具によるナデ調整を施す。 | 胎土に径4mm以下の赤褐色のシャームットを多く含む。 |
| 〃 -10 | TR19 SX II III層 | 青磁 碗 | — — — | 体部片である。内弯して立ち上がる。外面に細蓮弁文を施し、内面にも文様を施している。 | 内外面ともオリーブ灰色に施釉する。 | |
| 〃 -11 | 〃 〃 | 尾戸焼 〃 | — (3.4) 4.4 | 高台部～体部下半部分のみ残存。高台は下外方に下り、端部は丸くおさめる。体部は内弯して立ち上がる。 | 畳付以外の内外面に浅黄色に施釉し、貫入している。 | 京焼系。 |

王子遺跡の調査

1. 調査の方法

王子遺跡の調査は、試掘調査の成果に基づいて、試掘トレンチTR13の周辺を拡張して発掘区を設定した。なお、発掘区の区域設定にあたり、事前にT1～T7の確認トレンチを設定し予備調査を行った（平成4年1月20日～1月22日）。このうちT1～3までは、高樋川右岸の自然堆積土であったが、T4～7にかけて土器片等の遺物を含む暗灰褐色粘質土・黒灰色粘土の堆積を確認し、調査区域の範囲として取り扱うことにした。また、調査区域は国際線の低地であり、粘質土の堆積が厚いことなど土壌の条件を勘案して、矢板打設を行い土壁の崩壊防止等の安全対策を講じることにした。調査は、重機（PC200）を使用して表土（耕作土及び床土）を掘削除去し、その後人力により遺構検出を進めた。

発掘調査を進めるにあたり、検出した遺構・遺物の平面的位置を記録するために、座標を設定した。発掘区の中に4m方眼の座標を組み、基準の南北線を西からA、B、C・・・と呼び、東西線を北から1、2、3・・・とした。この東西・南北の基準線の交点を北西にもつ区画を、それぞれの組み合わせでA1、A2のように呼ぶ。なお、座標の設定にあたっては、任意のため、方位と基本線は一致しない。高さの基準として、国道56号線上のベンチマークから水準測量し、発掘区の内外にいくつか水準点を設けて使用した。

発掘調査は、掘削の段階で遺構検出面の傾斜のため、西側より順次検出されていく遺構及び遺物の検出状態を記録化しながら東へと進めていく形で実施し、遺構の全容を明らかにした。また発掘区の東側部については、確認調査区T1～4の成果を随時参考にしたうえ、部分的な深掘り調査を行った。

各遺構については、溝状遺構は西よりSD1～5とし、自然河川跡はR1とした。

2. 基本層序

発掘区における堆積土層は比較的明瞭な様相を呈している。SD5が検出される標高以上までは、全域共通の堆積土層をしている。R1の堆積のみ、若干複雑になっている。発掘区内での土層は、基本的に発掘区南壁面で観察した。発掘深度は地表下約0.6～3.4m、縄文時代と考えられる土層まで調査した。また、各時期の生活面と考えられる面の土層はSD1～5西側までは粘砂土であり、時期と共に西側から東側に傾斜していき、標高は約3.9～2.5mとなり、弥生時代の遺構となる。SD5～R1までの生活面は、SD5以西の粘砂土に続き青灰色粘土層となる。また、土層断面図では、現在の耕作土及び床土の二層については、部分的に発掘前に損失している部分もあり、表現していない。耕作土の地表面は標高約4.5m、耕作土層厚約20cm、床土厚約10cmであり、その下層より記してある。以下、上層から順次各土層の特徴を記す。

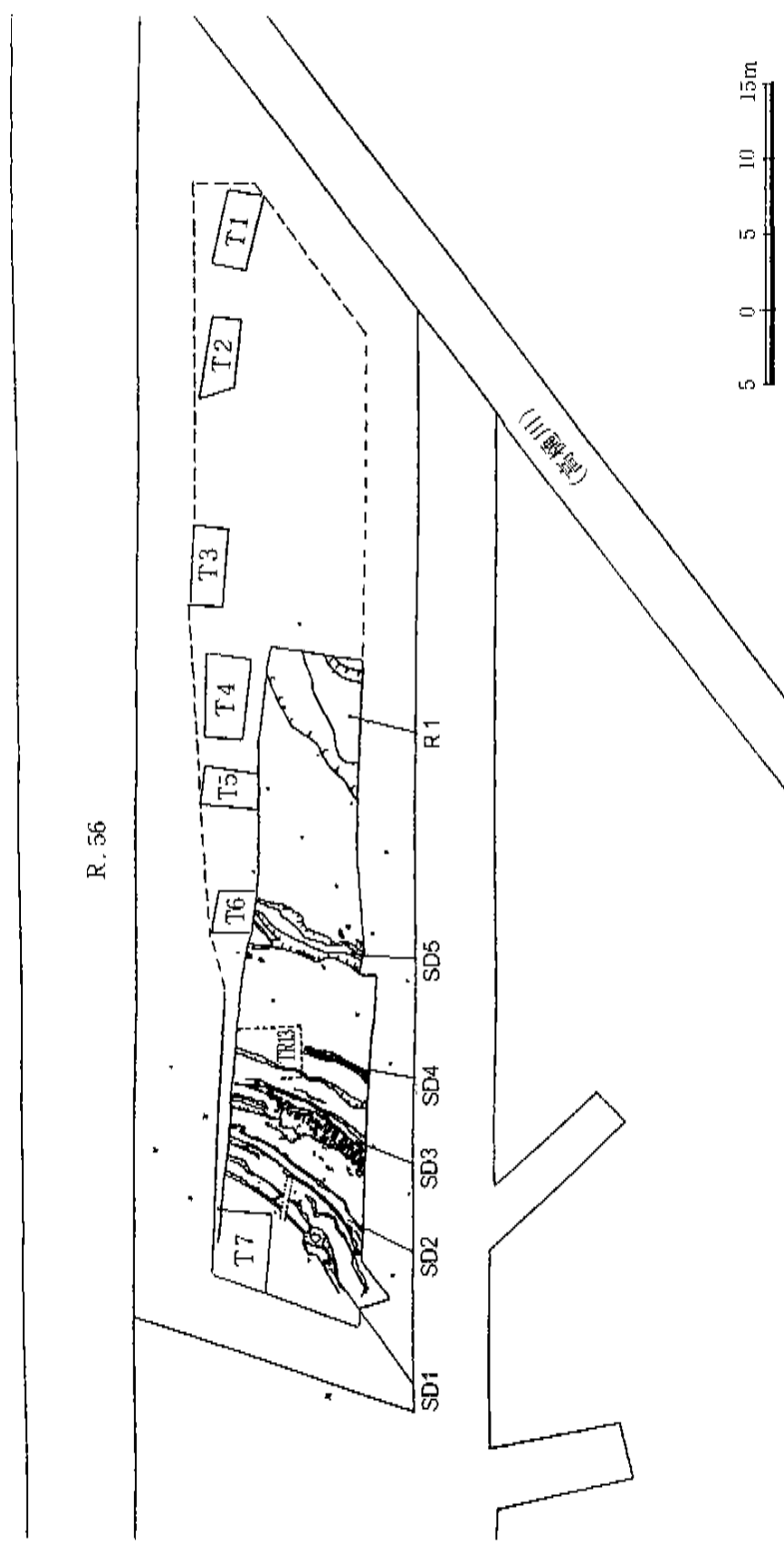
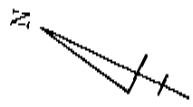


Fig. 8. 王子遺跡調査区配置図及び予備調査範囲図 (T1～7)

王子遺跡調査区の層序

| | | | |
|-----|---------|--------------|---|
| 第Ⅰ層 | 明灰褐色粘質土 | 層厚約 80 cm | 層上面は標高約 4.2 m。 |
| 第Ⅱ層 | 暗灰褐色粘質土 | 層厚約 80 cm | SD 1、SD 2、SD 3 及び SD 4 上層の埋土、堆積土となる。 |
| 第Ⅲ層 | 黒灰色粘土 | 層厚約 20 cm | SD 4 の西側の落ち込みより始まり、R 1 上まで堆積が続く。SD 4、SD 5 の埋土となる。 |
| 第Ⅳ層 | 青灰色粘土 | 層厚約 50 cm | SD 4 の西側の落ち込みより始まり、R 1 上まで堆積が続く。層厚は部分により若干の差がある。第Ⅰ層から第Ⅳ層までは、ほぼ全域に水平に堆積している。 |
| 第Ⅴ層 | 暗灰褐色粘砂土 | 層厚約 15～20 cm | SD 5 より R 1 西側まで堆積。 |
| 第Ⅵ層 | 青灰色シルト層 | 層厚約 15 cm | SD 5 より R 1 西側まで堆積。 |
| 第Ⅶ層 | 灰色粘土 | 層厚約 15 cm | R 1 の埋土の最上層。 |
| 第Ⅷ層 | 暗灰色粘土 | 層厚約 15 cm | R 1 の埋土で第Ⅶ層の下層。 |
| 第Ⅸ層 | 暗褐色粘砂土 | 層厚約 15～35 cm | R 1 の埋土で部分的に堆積。 |
| 第Ⅹ層 | 暗灰褐色粘砂土 | 層厚約 10～30 cm | R 1 の埋土で部分的に堆積。 |
| 第Ⅺ層 | 砂層 | 層厚約 20 cm | R 1 の底部に堆積。この砂層より下層になると砂利層 (Ⅻ層) となる。 |

(参考)

上記の堆積土層のなかで、粘土層としたものはいわゆる「粘土」の純粹堆積土ではない。土壌の特質としては、シルトより粒子が細かく砂粒を含むが粘性土は高い。手で押しつぶすと、引っ掛りが残る。粘砂土は、砂粒の混入度合いの強い土壌として区分した。

3. 検出遺構と出土遺物

調査区から、溝状遺構5条・自然流路1を検出した。溝状遺構は弥生～中世にかけて形成されたもので、埋土中から遺物が出土した。また、自然流路からは自然木、果実種子(桃)とともに、縄文土器片が出土している。

試掘調査で確認されたTR13からの古墳時代土師器類の出土は、SD4に伴うものである。以下、検出遺構順に内容を記す。

SD1

調査区の西端で検出された南北方向の溝で、北端はE1区南西隅に始まり屈曲しながらB2区北西隅に延びる。溝は両端とも発掘区外へ延長している。遺構検出面の標高は約3.9mで、溝底部の標高は3.7m前後を測る。溝の幅は約1.3～2.1mで、深さは約20cmを測る。C2区の位置では、遺構中央部に直径1.5m・深さ45cm前後の土坑が形成されている。溝埋土は暗灰褐色粘質土である。

遺構西側肩部と埋土中から須恵器・土師器細片、土錘(7・8)、敲石(9)、錢貨(「皇宗通宝」・48)、土製模造鏡(49)が出土した。遺構の形成時期については、所属時期の異なる遺物が混在して出土しており判然としない。渡来錢(「皇宗通宝」・北宗仁宗、宝元二・初鑄年号1039年)や土錘の出土、SD2の西側に形成されていることからすれば、中世の溝跡の可能性もある。なお、土製模造鏡(49)の出土は留意される。仮に、9・49の出土遺物がSD1に伴うものであり、他の出土遺物が混入したとすれば、遺構中央部の土坑の存在も考慮して、古墳時代までさかのぼることも視点に置く必要がある。

SD2

E2区北に始まり、屈曲しながらB2区南に延びる溝で、両端とも発掘区外へ延長している。遺構検出面の標高は約3.9～3.6mで、溝底部の標高は南端が3.7m前後・北端が3.5m前後を測る。溝の幅は約1.1～1.6m深さは北部で約30cm南部で20cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土を主体に、底部に若干、暗灰褐色粘砂土も堆積する。

埋土中から、瓦器碗(10・11)土師器碗(12～14)鍋片・東播系須恵器碗(15・21・22)須恵器杯蓋(16・17)高台付碗(18～20)甕片・灰釉陶器片・叩石(30)等が出土した。このなかで、瓦器は輪高台の碗類を主とし、その多くは外面にミガキが施され・内面には格子目の暗文を有する。東播系須恵器類は碗が多い。他の土師器碗類は回転糸切り底で円盤状の高台を有する。11・15・21・22の出土から、溝の形成時期は12C中頃～後半を前後する時期に求められる。

SD3

E2区南東、F2区南西隅に始まり若干屈曲しながらC3区南東に延びる。溝は両端とも発掘区外へ延長している。遺構検出面の標高は約3.7～3.4mで、溝の幅は約1.8～2.1m深さは北端で約14cm南部で約42cmを測り、西側が浅く東側が深くなっている。

溝底部の標高は約3.3m前後である。溝北岸には約50cm幅の規格で、木杭もしくは矢板による打ち込みの痕跡が認められる。溝の埋土は暗灰褐色粘質土である。

埋土中から、須恵器甕・碗・杯・皿片が出土し(23・24・42)、溝北部の西側肩部と南部肩周辺では須恵器甕片が散在して検出された。遺物は、8C後半～9C初頭に位置づけられるもので、溝の形成時期は奈良時代後半頃を前後する時期であると考えられる。なお、SD2の埋土中に含まれていた16～20の遺物、SD4埋土上層からの須恵器片(41)等は、共に暗灰褐色粘質土中からの出土であり、SD3の埋没時期に伴う遺物であることが考えられる。

SD4

緩やかに傾斜してきた遺構検出面が、F3区～D4区で約25～35cmの落差で落ち込み、その低位置から緩やかな傾斜が始まる。SD4は、E3区南東隅から始まりD4区東に延びる小溝である。溝の北端は試掘区に延び南端は発掘区外へ延長している。遺構検出面の標高は約3.0mで溝の幅は約20～30cm深さは約10cmを測る。溝底部の標高は約2.9m前後である。埋土は2層に区分され、上層が暗灰褐色粘質土、下層が黒灰色粘土である。

上層から須恵器杯蓋(41)・甕片が、下層から古式土師器(25～29・31・40)・弥生土器片が出土した。出土土器のなかで、31・40は溝南側の東側肩部で出土した。また、SD4周辺から土師器高杯(32～39)が出土している。下層からの出土土器は古式土師器類が主体で、ごく少量のヒビノキ「式併行期の土器細片(口縁部叩きだしの甕片・底部丸底の甕片)が含まれていた。

SD4の北側は、TR13設定地に該当する。TR13から出土の古式土師器類は、SD4下層に伴う遺物であるとみなされる。

SD5

H4区に始まりF5区に延びる溝で、両端とも発掘区外へ延長している。遺構検出面の標高は約2.8～2.4mで、溝の幅は約3.4m～1.5m深さは約45cm前後を測る。また溝底部の標高は2.0m前後を測る。SD1～4が隣接して形成されているのに対して、東側の自然流路寄りに位置する。溝南側では、東肩部周辺に径12～30cm深さ2.5～6cm前後の浅い楕円状のピット7個がみられる。溝の埋土は黒灰色粘質土で、埋土中に弥生土器片(50～59)及び自然木片(一部加工痕のある木片あり)・磨製石斧片(46)を含む。

なお、SD4から5にかけての第Ⅱ層黒灰色粘土中から敲石(47)・土師器高杯(43～45)が出土している。

遺物のうち土器類は、弥生前期土器片を主体とするが(50～56・58・59)いずれも細片である。成形技法・文様構成の特徴から、大籬式土器の範疇に属すると考えられる。なお、57は外面に二枚貝条痕とみられる痕跡を有する土器片のため、焼成・胎土は類似するものの除外することとした。混入した遺物と考えられる。47の磨製石斧は蛇紋岩製で、石斧先端の破片である。刃部から側面にかけて丁寧に研磨している。

出土遺物から、SD5の形成時期は弥生時代前期末頃に求められる。

R 1

K 7区東に始まり、I 7区・J 8区に延びる自然河川跡で、流路は南西方向である。両端とも発掘区外へ延長している。検出面の標高は約2.4～1.7mで、幅は約5.5m深さは約1.25mを測る。最深部の標高は1.2m前後を測る。埋土は、上層より暗灰色粘土・黒灰色粘質土・暗灰褐色粘質土が主体で、暗褐色粘砂土・暗灰褐色粘砂土も含まれ下層は砂層となる。堆積土中には、自然木・果実種子を含む。

縄文土器片（60～62）が、X層暗灰褐色粘砂土等から出土している。土器は細片であるが、深鉢胴部片とみられる。60は外面に細かい縄文地が施紋され、内面には巻貝調整が施されている。61は、内外面とも入念に削られた土器で、削りの上にナデ調整が施される。黒雲母・長石片を多く含む。62は外面に二枚貝条痕をもち、内面は丁寧にナデられる。胎土には小砂粒を多く含む。縄文後期末～晩期前半に属するとみられる。

小結

SD 1～5は、いずれも北側から南西方向にかけて屈曲する溝跡で、東側にかけて緩やかに傾斜しながら湾曲する地形ラインに即して形成されている。また、時代が移行するのに従って順次、西側に位置を移し替えながら形成されている。溝幅・深さ等の相違はあまり認められないが、SD 3の如く片側の溝肩に矢板・杭列を伴う遺構もみられる。SD 1では溝中に円形の土坑が穿たれていた。最も古く位置づけられるR 1の存在から、旧地形は自然流路沿いの河川端として復元される。河床の高さや水位の変化に従って形成場所を移し替えたものとみられる。

出土遺物のなかで、SD 4からの古式土師器類については高杯の出土点数が多い。また、土製模造鏡が出土したように祭祀関連遺物が含まれている。調査区の範囲が限定されており、遺物の出土状況を全体的に広く捉えることはできなかったため推測の域をでないが、溝への遺物廃棄行為のなかに、水路や河川に対する祭祀行為が内包されている可能性がある。

SD 1～5は同一方向をとる溝跡であり、調査区北西側に微高地が存在していたことがうかがわれる。王子遺跡の北西には、弥生～中世の遺物散布地である後田遺跡が所在しており、この遺跡と連結した微高地上に集落跡が存在することが考えられる。

出土した土器類については、SD 4からの古式土師器が最も出土点数が多かった。このなかで、試掘調査時に出土した内面ヘラ削りの施された二重口縁壺や31の甕は初見であり、県下の古墳時代の土師器編年を検討するうえで良好な資料が得られることになった。また、SD 3からの律令期の土師器類やSD 2の中世の土器類についても、古代から中世にかけての当地方における土器様相の変遷を探るうえで貴重である。特にSD 2の瓦器椀・東播系須恵器類については、資料的に数少ない県下の12C中頃～後半の中世土器資料を埋めるものとして評価されるものである。

今回の調査によって、王子遺跡は縄文後期から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになると共に遺構形成の一端を確認し、基準資料となる土器資料を併せて得ることができた。

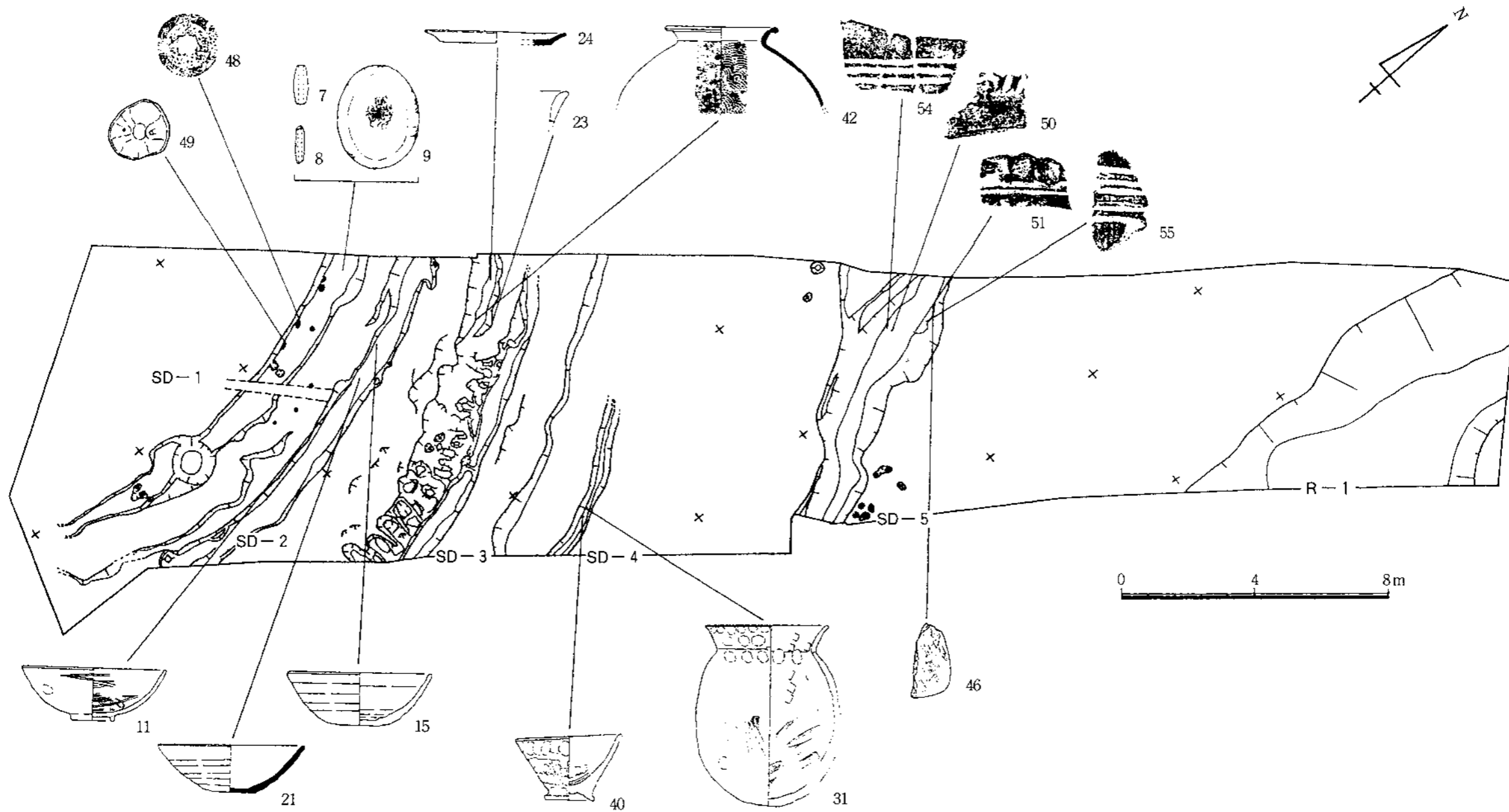


Fig 9. 王子遺跡遺物出土狀況圖

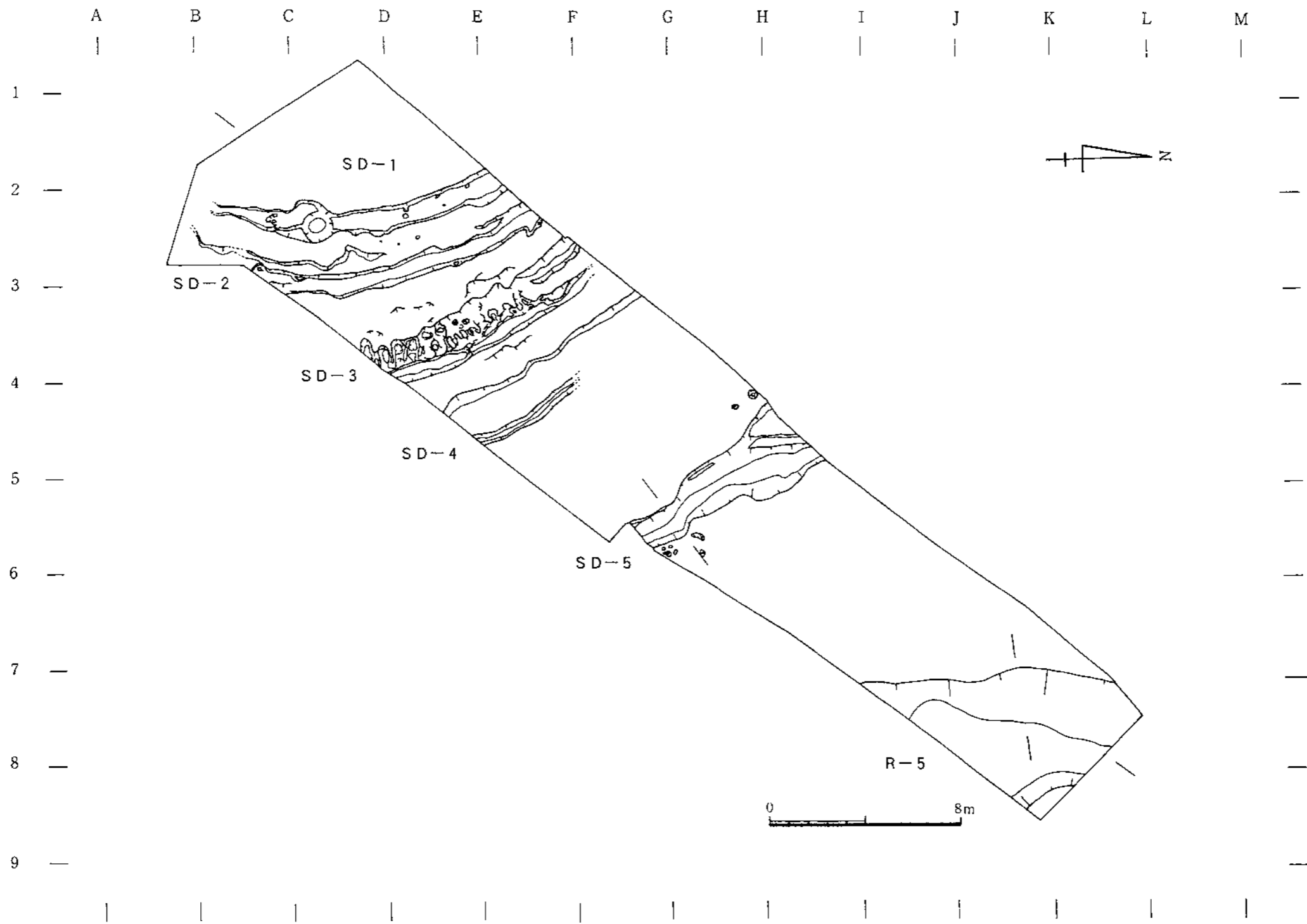


Fig10. 王子遺跡 SD 1~5・R-1 平面図

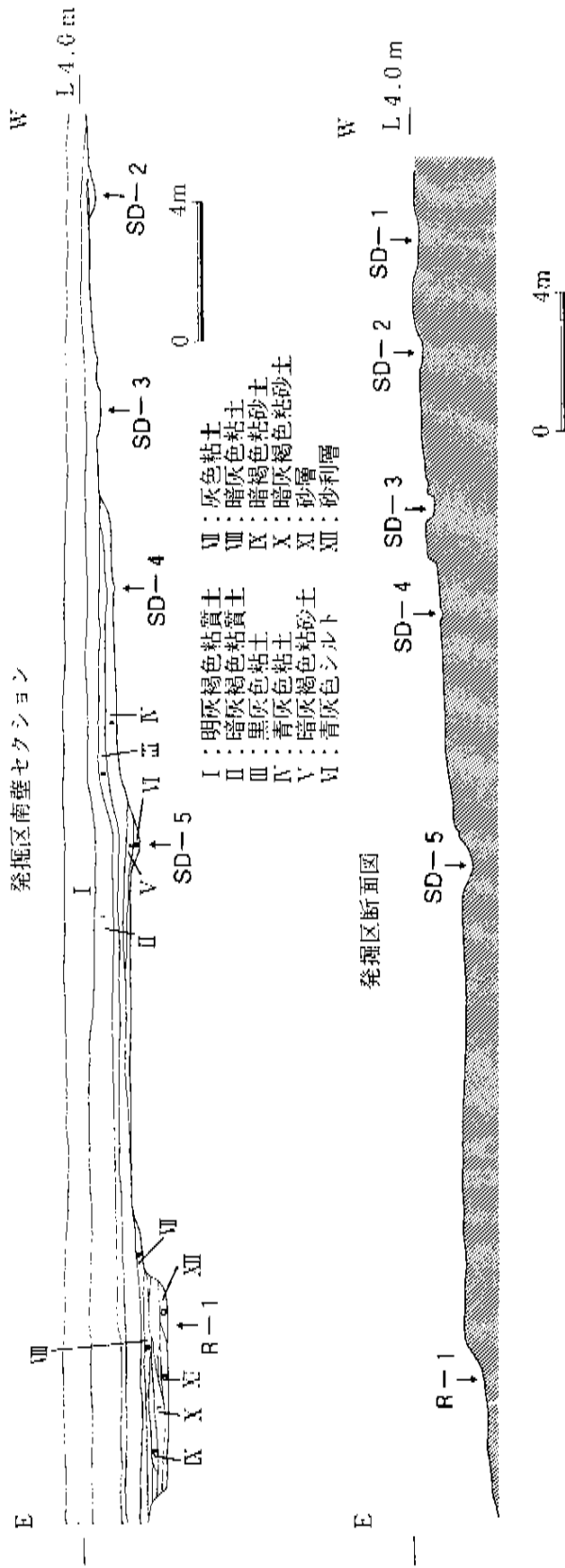


Fig11. 王子遺跡土層断面図

SD-5バンク (南壁セクション)

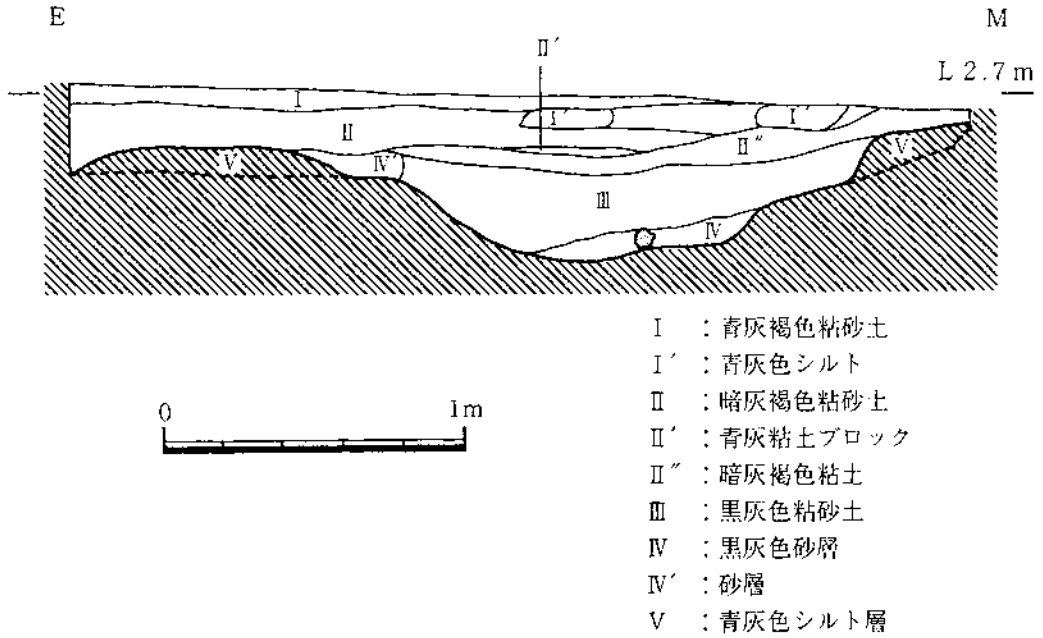


Fig12. SD5 土層断面図

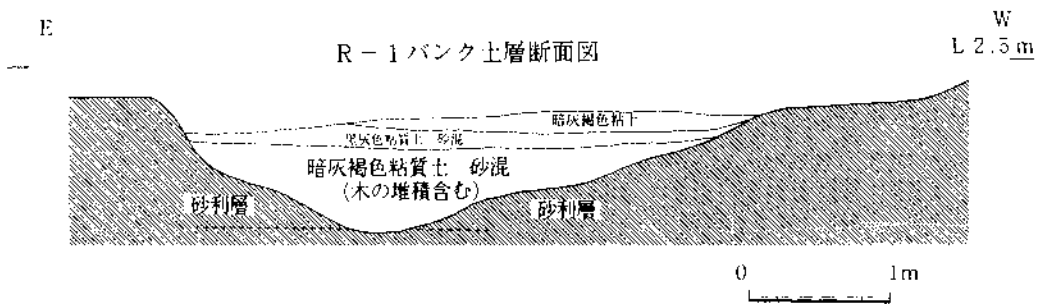


Fig13. R1 土層断面図

西ノ芝遺跡の調査

1. 調査の方法

調査地は、春野町弘岡上字西ノ芝で、国道56号線弘岡分岐から約320m西側の地点に位置する。周辺は木下川左岸の標高5.7m前後の低地となっている。

試掘調査時のTR19から溝状遺構等が検出され、遺構埋土の第Ⅰ'層黄褐色粘質土層・第Ⅱ'層灰色粘土層から中世及び近世の陶磁器片・土師質土器片が出土したことから、本発掘調査ではTR19周辺を拡張し、遺構等の検出作業を行った。調査区は、国道56号線南側の道路沿いに接して10m×10mの範囲を任意に設定し、遺構等の検出状況に応じて一部拡張した。

測量及び遺構等図化作業については、道路法線基準杭・現地境界杭等を基点に既知の測量成果を援用して水準測量・平面測量などを実施した。

2. 基本層序

第Ⅰ層茶褐色粘質土（表土）・第Ⅱ層黄褐色粘質土（客土）・第Ⅲ層褐色粘質土（地山）で、第Ⅲ層上面が遺構検出面となっている。表土から遺構検出面までの平均堆積厚は約16～26cm前後と浅い。耕作土直下で遺構が検出された。また、第Ⅱ層中からは、須恵器・土師器・土師質土器・近世陶磁器の細片が出土したが、各時期の包含層は検出されなかった。

3. 検出遺構と出土遺物

溝1条（SD1）・土坑4基（SK1～4）・ピット・柱穴が検出された。

SD1

調査区南西部で検出された東西方向の溝跡で、試掘調査時のTR19により東側の一部を確認した。検出長4.2m・幅0.6～0.68m・深さは東側で0.25～0.40mと比較的浅いが、西側では0.57～1.17mと深く、埋土は暗灰褐色粘質土が堆積していた。土師質土器細片・近世陶磁器片が出土しており、近世以降に形成された溝（水路）とみられる。

SK1

SK1～4等は、調査区北側で検出された。SK1は不整形の落ち込みで、深さは6～9cmと浅い。埋土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物はみられなかった。

SK2

径1.44m前後の楕円状の平面形を呈する土坑で、深さ34cm前後を測り、底面は平坦である。掘形周囲に厚さ4cm程度のハンダ（明黄褐色粘質土）が施されている。埋土は2層に区分され、上層は灰褐色粘質土（厚さ24cm前後）・下層は暗灰褐色粘質土（厚さ12cm前後）である。上層から砥石（5）鉄製唐鋏（6）・底面直上から、灯明皿（2）・台付灯明皿（3）・伊万里染付皿（4）が出土した。また、上層からは混入とみられる緑釉（1）が出土している。SK2の性格としては、トイレ跡の可能性をもつが、土坑底面にはハンダが布敷されておらず、肥桶（施肥用）を据え置いてたことも考えられる。

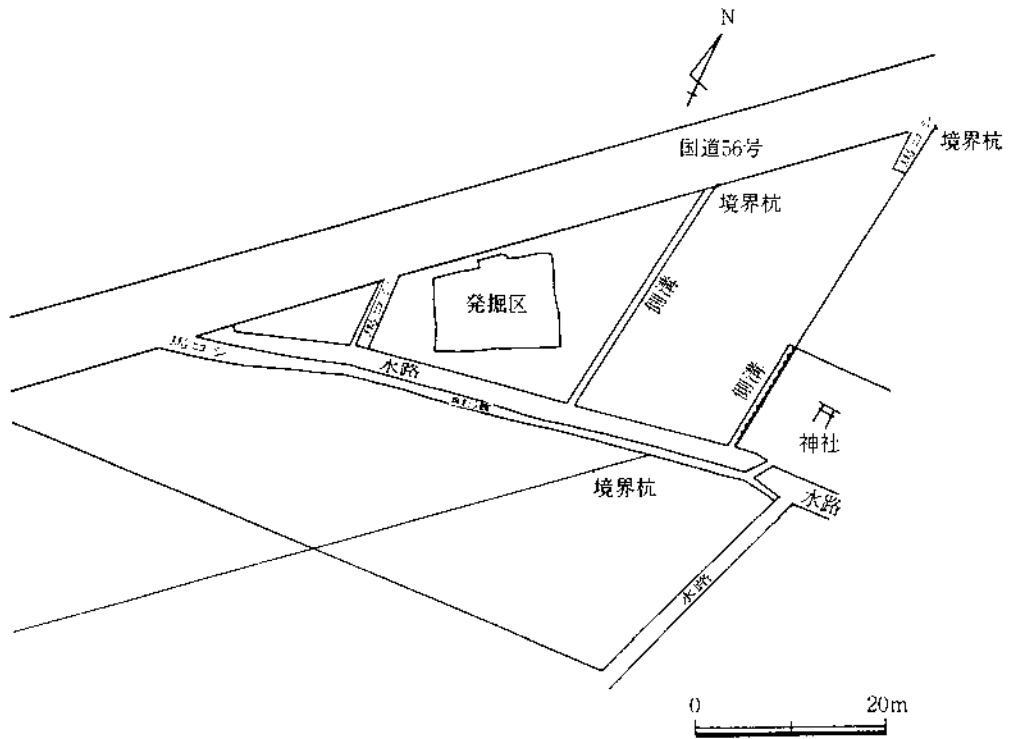


Fig14. 西ノ芝遺跡調査区位置図

SK3

長軸2.24m短軸1.74m前後を測る隅丸長方形の平面を呈し、深さは43～48cmを測る。西隅の一部を、0.9m×1.1m・深さ63～65cmを測るピットにより切られている。埋土は灰褐色粘質土である。遺物の出土は認められなかった。

SK4

0.94m×1.1mの楕円状の平面形を呈し、深さは12cm前後と浅い。埋土は灰褐色粘質土である。径0.54m前後を測る柱穴状のピットを切っている。出土遺物は皆無であった。

柱穴・ピット

調査区北側において、土坑の周辺から柱穴・ピットが検出されている。そのなかには、土坑と切り合い関係を有するものもあり、数時期にわたる遺構形成がうかがわれるが埋土中からの出土遺物に乏しく、時期を明確にするには至らなかった。ピットは径12～16cm・深さ4～21cm前後のもの、径31～51cm・深さ31～77cmの範囲に納まるもの、径62～82cm×80～106cm・深さ33～73cm前後を測る土坑状ものなどがみられた。調査区北西端のピットは0.48×0.5mの方形の掘形をもち、中央部に径16～18cm・深さ14～16cmの小ピットを有しており、形状から小規模な建物跡等の柱穴とみられる。なお、総じて検出遺構の内容からは建物跡等の配置状況を明らかにすることはできなかった。

小結

TR19による試掘調査の成果を基に、調査範囲を拡幅して実施した今回の調査では、溝跡(SD1)・土坑(SK1～4)・柱穴及びピットの所在を確認することができた。

TR19の設定地は発掘区の東南部に位置するが、この部分では黒色ブロック土を含む黄褐色粘質土(客土)が平均約80cmの厚みで堆積しており、一段下がった地形を呈していたことが明らかである。SK3の西肩部では黄褐色土はごく薄い堆積しか認められなかったことから、TR19方向にかけて傾斜した地形であったとみられる。この客土については、地形の平坦化のために他の場所から運ばれて埋められたと推測されるが、内容・時期等については明確にしたい。

SK3とピット、SK4は切り合い関係をもち、客土及び客土上のピットの存在を含めると少なくとも5時期にわたる遺構形成がみられる。SK2から出土した近世陶磁器のなかで4は19世紀代(享和～万延年間)の肥前陶磁器(伊万里染付皿)であり、SK2の形成・廃棄時期に関して具体的な帰属年代を与える資料となっている。他の遺構がSK2の形成時期とかけ離れていなければ、その多くは近世末～幕末以降の時期に求められよう。なお、SK2に混入した緑釉や表土等に散布していた須恵器片・土師質土器片に対応した古代・中世の遺構形成については、今次の調査では明らかにできなかったが、調査地周辺において遺跡が所在する可能性もたれる。

調査地の性格については明白ではないが、SK2・柱穴等の存在からみて、幕末前後の屋敷地乃至はその隣接地として機能していたことが推察される。

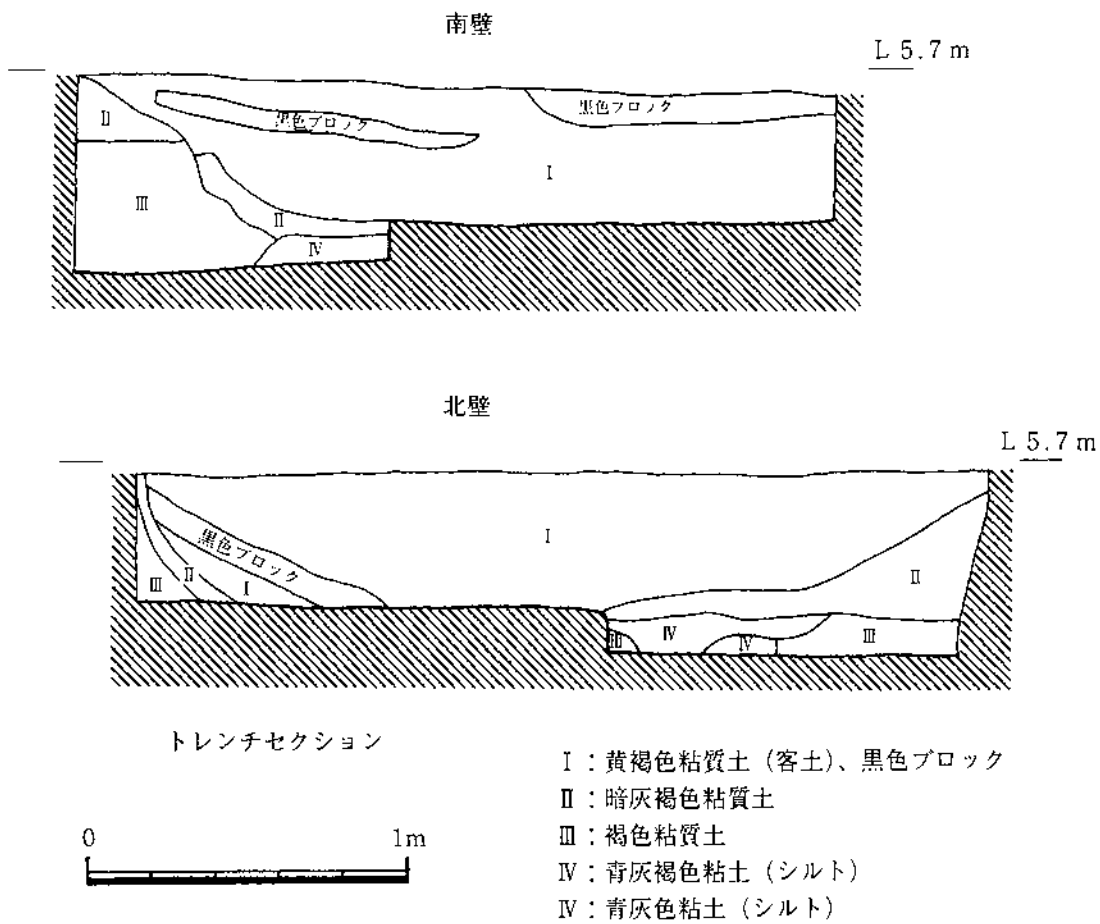


Fig15. 西ノ芝遺跡 TR19土層断面図

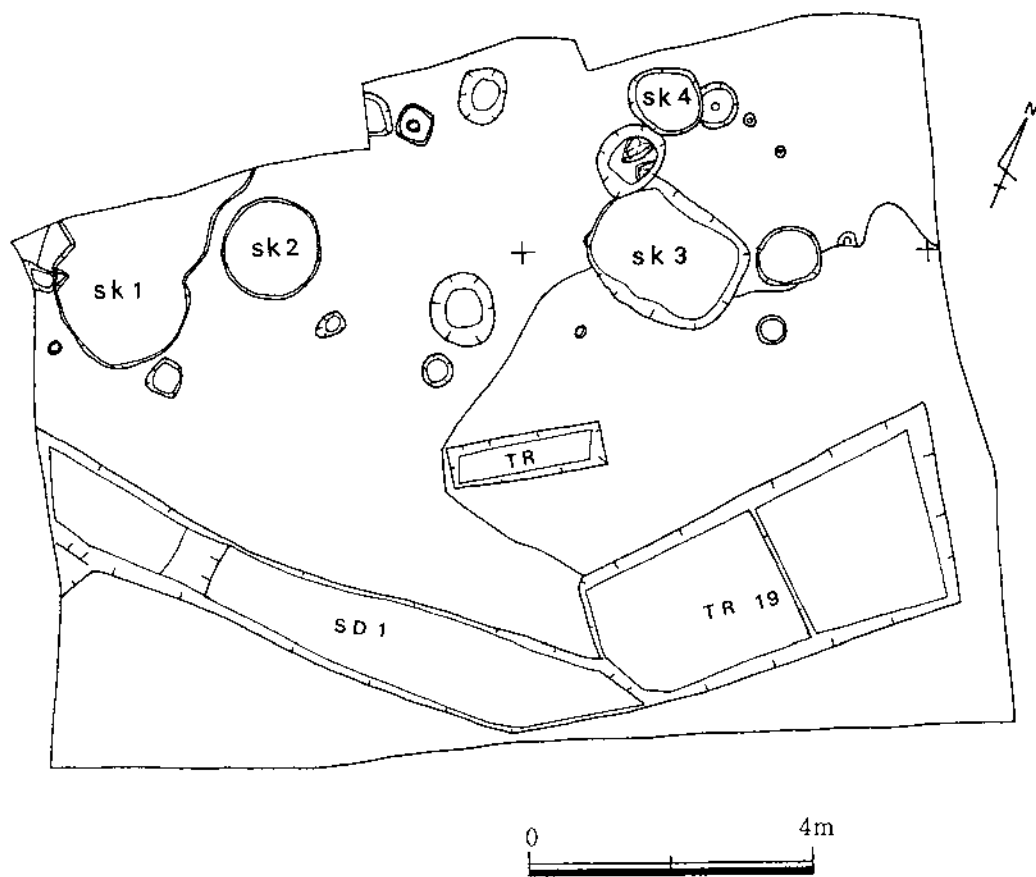


Fig16. 西ノ芝遺跡検出遺構平面図

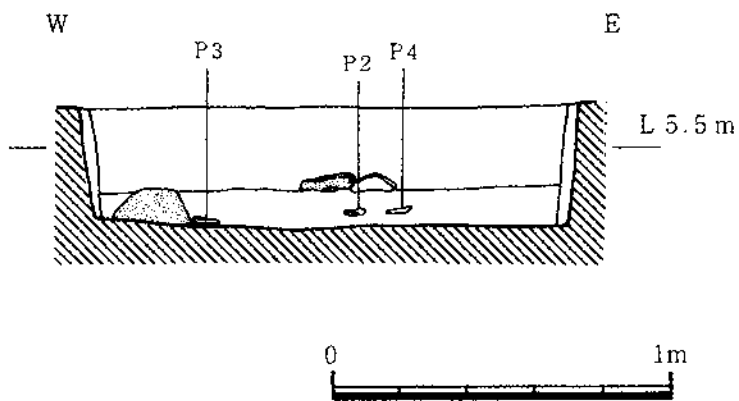
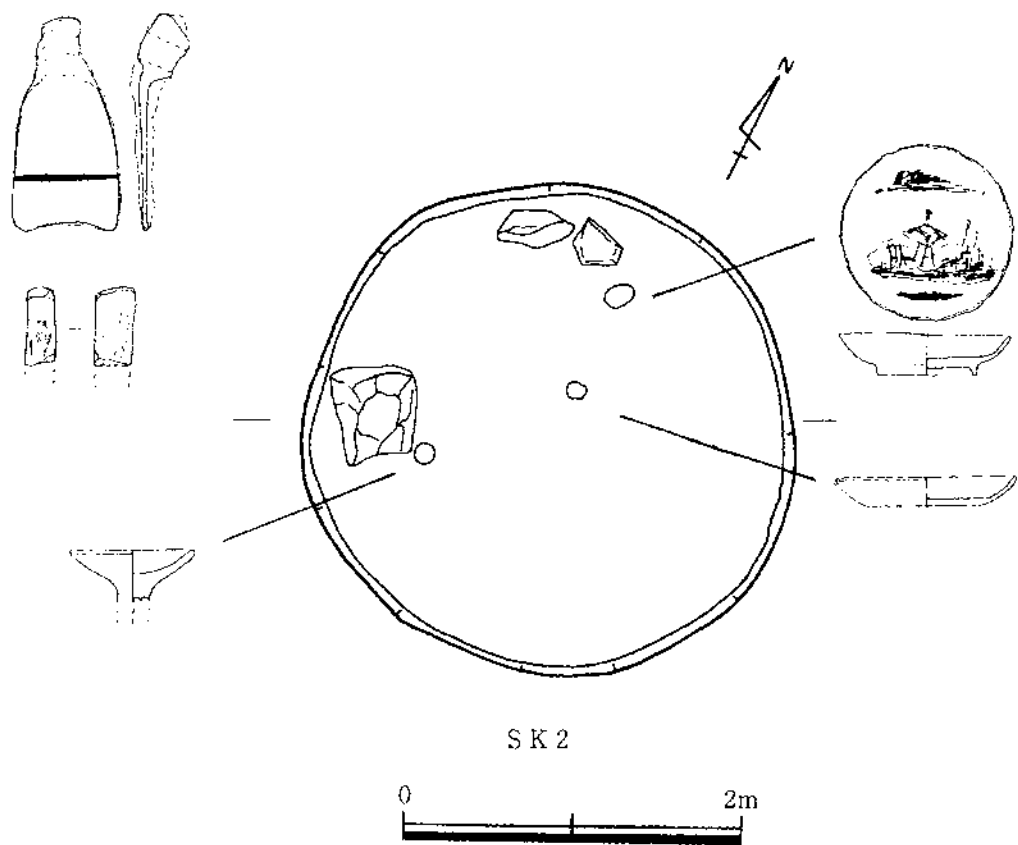


Fig17. S K 2 遺物出土状況図

第 IV 章 まとめ

国道 56 号線道路改良計画に係る春野バイパス建設工事に伴う発掘調査として実施した王子遺跡（春野町弘岡中宇王子、所在）・西ノ芝遺跡（春野町弘岡上宇西ノ芝、所在）の今次調査において、王子遺跡から溝跡 5 条（SD1～5）・自然流路 1（R1）が検出され、縄文後期末～晩期前半の土器片・弥生前期末土器片・磨製石斧・古式土師器類・土製模造鏡・須恵器・土師器・土錘・敲石・叩石・灰釉陶器・東播系須恵器類・瓦器・土師質土器・銭貨などの出土が、また、西ノ芝遺跡では溝跡 1（SD1）・土坑（SK1～4）・柱穴・ピットが検出され、須恵器片・緑釉片・土師質土器・青磁片（試掘調査時）・近世陶磁器類・唐鋏・砥石が出土した。

調査の結果、王子遺跡は縄文後期～中世の複合遺跡であり、発掘区北側にかけての遺構形成が推考されること、また西ノ芝遺跡に関しては近世末～幕末にかけての屋敷地もしくはその縁辺地として利用され、古代～中世の遺跡の存在が周辺区域に推測されることなどの成果があった。確認された主要遺構・遺物についてふれ、調査成果をまとめることにしたい。

1. 遺構

王子遺跡の SD1～5 は、南西方向の流路をもつ自然流路 R1 の西側に形成された溝跡である。溝跡から自然流路にかけては、東側に緩やかに傾斜しながら南西方向に湾曲している地形を呈し、流路沿いの微高地が存在していたことが明らかである。SD5→4→3→2 の順で、弥生前期から古墳時代中期、奈良時代、平安末～鎌倉時代の遺物を含む溝跡がみられることは、自然流路の埋没状況や水位の高低・流水範囲の変化・後背湿地の内容等に伴って順次、地形のより高所に形成場所を移し替えていたことを示すものである。R1 は、発掘区東側に位置する高樋川の旧流路とみられ、SD1～5 は旧高樋川河岸縁辺に形成された遺構として捉えることができる。発掘区全体の俯瞰からは、SD1～5 の形成地に北側丘陵部から低湿地へと派生する埋没微高地（低位段丘先端部）が存在し、R1 はこの地形に沿って流れていたものと推察され、SD1～5 が R1 に別して湾曲する形状を呈していることは、旧地形の残存痕跡として理解することができる。SD1～5 に関しては、北側丘陵谷部から丘陵裾沿いに旧高樋川へと流れる自然水路に導水のために改良を施したものであり、形成時には低位丘陵地形が遺構西側に残存していたものと考えられる。なお王子遺跡は、後田遺跡と一連の遺跡である可能性を有し、両遺跡北側部に該当する微高地上に縄文～中世の集落が形成されていたことが類推される。

西ノ芝遺跡では、近世末～幕末にかけて形成されたと考えられる水路跡（SD1）、土坑（SK1～4）、柱穴・ピットが検出されている。発掘区周辺は、屋敷地乃至はその周辺地として利用されていたことが推測されるが、土坑のなかに土佐の近世末～幕末の習俗の一端がうかがえる資料が確認されている（SK2）。この SK2 は、周壁を厚さ 4 cm ばかりのハンダで覆った直径 1.44 m 前後の楕円状土坑であるが、埋土上層から砥石・鉄製唐鋏が、下層の底面直上から灯明皿・台付灯明皿・伊万里染付皿が出土し、遺構の廃棄に伴ってこれらの遺物が投棄され

たことがうかがわれる。留意されるのは、砥石・鉄製唐鋸・灯明皿・陶磁器類のセット関係で、土佐の民俗事例(1)のなかで報告されている井戸神・便所神への供献品としての砥石・刀子（鉄製工具）・碗類・塩などの組み合わせの一例であると考えられる。現在においても、井戸跡の廃棄の際には神事を行い、井戸跡には竹筒をいれて地面より少し上に出して空気穴としたり、便所跡の廃棄に際しては塩・硫黄・砥石・小刀子（小形ナイフ）又は鎌・炭・酒などを供えて、竹筒やビニール管等をいれて空気穴とするなどの行為が行われており、地元弘岡地区の古老からの聞き取り調査においてもごく最近まで、便所跡を埋設する際は砥石・金物・塩などを埋め、「まつり」を行っていたことが知られている。また、神官を招いての神事は井戸跡の廃棄時に行われているのに対して、便所跡廃棄の場合は家主・住人・大工などのごく内輪の関係者によって施行されている。なお、砥石・塩・金物類は主として便所跡に、竹筒等により空気穴を通すことは両者に用いられている。

S K 2 からの出土品を、現在まで伝わる民俗事例と照らし合わせてみれば、砥石・鉄製唐鋸（金物・農耕具）は便所跡廃棄の際に用いられている品目に該当し、灯明皿・台付灯明皿・伊万里染付皿は祭事に使用された祭具類の一部とみなされる。S K 2 の性格としては、便所跡であった可能性を帯び、廃棄にあたって「便所神」への祭礼が行われていたことが復元される(2)。S K 2 の構造からは、ハンダ囲いは土坑の周壁にとどまり底面には敷かれていない。このため、便所跡であるにしても遺存土坑が直接、便槽の役割を持っていたのではなく、土製又は陶製の筒状桶や木製桶、甕などが溜め桶としてももとは据えられており、土坑はその撤去後に埋め直しされたものであると推測される。いずれにしてもS K 2 は畑地等の耕作地に作られた野溜ではなく、屋敷の付属施設として構築されたことが考えられる。

S K 2 からの資料は、本県の民俗事例の伝承過程を示す例として把握されるばかりではなく、近世の農村における習俗を解明するうえで興味深い。日常生活のなかで農耕活動が占めていた比重はきわめて高く、生産・豊穰に関連する農耕祭事が俗信にわたっても強く影響力をもっていたことがうかがわれる。おそらく農耕祭事を含めた禁忌行為に関しては、個人の家屋敷の作事と雖も例外ではなく、村落内の共同規制を受けていたものであると考えられる(3)。

2. 遺物

王子遺跡からは、縄文後期末～晩期前半に属するとみられる土器片が自然流路R 1 のX層から、また大篠式に位置づけられる弥生前期末の土器片と磨製石斧がS D 5 から出土している。縄文・弥生期の資料については少量ではあるが、当該期の集落の存在を呈示している。

出土土器類のなかで点数が多かったのは、試掘調査時にT R 1 3 から、またS D 4 下層から出土した古式土師器類である。器種としては高杯の出土点数が多い。このなかで、内面ヘラ削りの施された二重口縁壺 (Fig 7-1) ・甕 (31) は初見で、ヒビノキ式・馬場末式土器以降から須恵器共伴時期以前に位置づけられる古墳時代中期の土器類であると考えられる(4)。高杯についても共伴資料であるとみられ、一群の土器類として把握される。県下では該当期の資料が少なく、今後の編年作業上に基礎資料となるものと考えられる。なお、高杯の出土数やT R 1 3 ・

SD4の土器出土状況、出土位置は離れているものの土製模造鏡が出土していることなどから、遺構として捉えることはできなかったが、土器類の一括廃棄による祭祀行為（祭祀遺構の形成）が存在していた可能性もある。

古代の遺物については、SD3から奈良時代後半に位置づけられる須恵器甕・碗・杯・皿が溝の埋土から出土している。また、古代末～中世にかけては、SD2から東播系須恵器類・瓦器・土師器椀、鍋などが、SD1から銭貨「皇宗通宝」が出土した。SD2出土の東播系須恵器類・瓦器は12c前半～中葉頃に属すると推測されるが、比較的まとまった資料であり編年資料としてばかりではなく、この地域への流通を考察するうえで基礎資料となるものである。

王子遺跡については、R1及び覆土等からの出土資料を除いて溝跡等の遺構に伴う遺物のなかに土製模造鏡・SD4の古式土師器類出土状況のように祭祀行為をうながす資料の存在が認められる。また、SD1～3出土遺物についても、R1や各溝跡を対象にした水辺（河辺）の祭祀に伴う可能性を内包している。旧高樋川の河辺を対象とした祭祀遺跡として、王子遺跡を視点に置くことも必要であることを指摘しておきたい。

西ノ芝遺跡では、緑釉・須恵器・土師器細片などの古代に属する遺物の他、中世の土師質土器・青磁片・近世陶磁器類・砥石・唐鍬などが出土している。SK2から出土した口銹の伊万里染付皿は、19c前半～中頃に位置づけられる肥前陶磁である(5)。また、SK2の他出土資料である砥石・灯明皿・台付灯明皿・唐鍬からは、近世農村における祭礼行為の一端を示す資料として興味深い。

註(1) 桂井 和男「土佐俗信抄」『俗信の民俗』(民俗民芸双書79)岩崎美術社 1973・11
(10 居住)の項において以下の諸例が報告されている(p246～247)。
「便所のつぼをつぶす時(埋める時)は底をぬき、砥石の破片を投げ入れておく(高知市円行寺)、わら人形と砥石を入れて埋める(土佐郡土佐町相川)、牛鍬の金属の部分を埋める(室戸市室津)、刃物と南天の葉(あるいは梅の木)を入れ埋めてしまうとその上に洗米と神酒を上げる(幡多郡大方町田野浦)、酒を祭り塩七俵を投げ入れるかわりに一握りの塩を七つの小さい俵に入れて埋める、竹の節をぬいて底から立てて地上に出し家のあるかぎりそのままにしておく(幡多郡大方町馬荷)、きれいに清め、つぼのほとりに砂を盛り神主が竹串にはさんだ幣を立てて祭り、砂をつぼの底にまいた後でつぼを埋め、幣を立てておく(土佐郡本川村)、月の一・十五・十八の三日は便所の神の祭りである(吾川郡春野町弘岡下)」(文章抜粋、要約)

(2) 土佐の「便所神」信仰の状況・形態・祭事内容等、他地方での民俗事例、対象となった祭神の由来などを詳細に検討するまでには至らなかった。

従って、資料解釈に遺漏・相違が多いことと考えるが、SK2の内容から以下、私見を試みて広く先学の指摘を望みたい。

記紀の説話のなかには、「いざなみのみこと」が火神「かぐつち」を生み、続いて土神「埴山姫・はにやまひめ」及び水神「みつはのめ」を生む事が記されている(記上巻・紀一書第五段第二・第三)。また、紀では、「はにやまひめ」は「いざなみのみこと」の大便から、「みつはのめ」は小便から神と化することが記されている(一書第五段第四)。また、土神「埴山姫・はにやまひめ」は火神「かぐつち」との間に「稚産霊・わくむすひ」を生むとされる(紀一書第五段第二)。

この「稚産霊・わくむすひ」は五穀等を生み、農業の起源神でもある。

土と火の神から農業神が誕生する説話は、農耕生活のなかで広く取り入れられ、祭る形態を変えながら「便所神」信仰にまで波及したものと推測され、「便所神」は生産・豊穰にも関連する神として考えることができる。

SK2は、土によって埋められ、砥石・農耕具(鉄製唐鋤)と灯明具(灯明皿等)・染付皿が供えられていた。このうち灯明具は火神に関係し、砥石・農耕具類は農業神に、そして全体的に土神への信仰が認められ、火神・土神・農業神への祭祀がセットになっているように推察される。この祭祀の背景には、改良肥料の普及に至るまで人糞が施肥として活用されていたことが考慮される。

なお、水については不浄の浄化、施肥の濃度調整など便所とも密接な関係をもっており、水神「みつはのめ」への祭祀も含まれていた可能性があるが、水神は主として不浄とは切り離されて、清浄が求められる飲料用水等の「井戸神」の祭りのなかで対象になったものと推定される。SK2における祭祀行為は、「病にはならないように」「施肥が豊穰をもたらすように」「家族の健康と安全が続き、家が栄えるように」「これまでの感謝と祈り」「禍のないように」「安産」「子供の成長が健やかに」「美人になるように」などの現在にも通じる諸々の願いがこめられているように考えられるが、主として農業生活を送る中での信仰形態を見ることができると推考される。

- (3) 上記(2)に関連して、農耕祭事については個人の作事ではあっても、良し悪しの行為結果が村落の生産・収穫や他者にも影響が及ぶものであると認識されていたとすれば、祭りの方法などにある種の約束事が決められていたと考えられる。

水路・井戸への祭りに対する村落の共同祭事例や、個人の神事等作事への共同参加形態などは、村落経営という運命共同体のなかで村の構成員として個々人が生活風習の中でも強い規制を受けていたことがうかがわれる。村落内の紐帯が求められた封建社会にあつては、より強い規制力が働いていたものと考えられる。

- (4) 春野町・西分増井遺跡群で検出された竪穴住居ST8・ST13からの資料を基に、古式土師Ⅰ期(ヒビノキ式・ST8)・Ⅱ期(馬場末式)・Ⅲ期・Ⅳ期(ST13)の編年区分が試みられている(下記文献)。このなかで、Ⅰ期とされるST13出土土器は、内面ヘラ削りが顕著で外面に叩目痕はみられない。また共伴須恵器も確認されていないことから、馬場末式に一型式おいて後続する須恵器出現前の土器群として位置づけられている。

王子遺跡・SD4出土の古式土師器類については、甕の内面ヘラ削り痕が認められない馬場末式に比べて明らかに後続し、Ⅳ期・西分増井遺跡群ST13資料よりは形態・成形技法で古相を呈している。

上記編年区分のなかでは、Ⅲ期に該当する資料として扱うことができようが、竪穴住居跡・土坑などからの土器組成がうかがえる良好な資料の増加を待つて、今後詳細に検討することが必要であると考え。現段階では、馬場末式に後続する5c初頭～前半頃(古墳時代中期)の土器群として位置づけておきたい。

出原恵三 編著 『西分増井遺跡群発掘調査報告書』 春野町教育委員会

1990・3

- (5) 大橋康二 他 『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館 1984・10

北九州市教育文化事業団 『砥石山遺跡』 北九州市教育文化事業団 1984

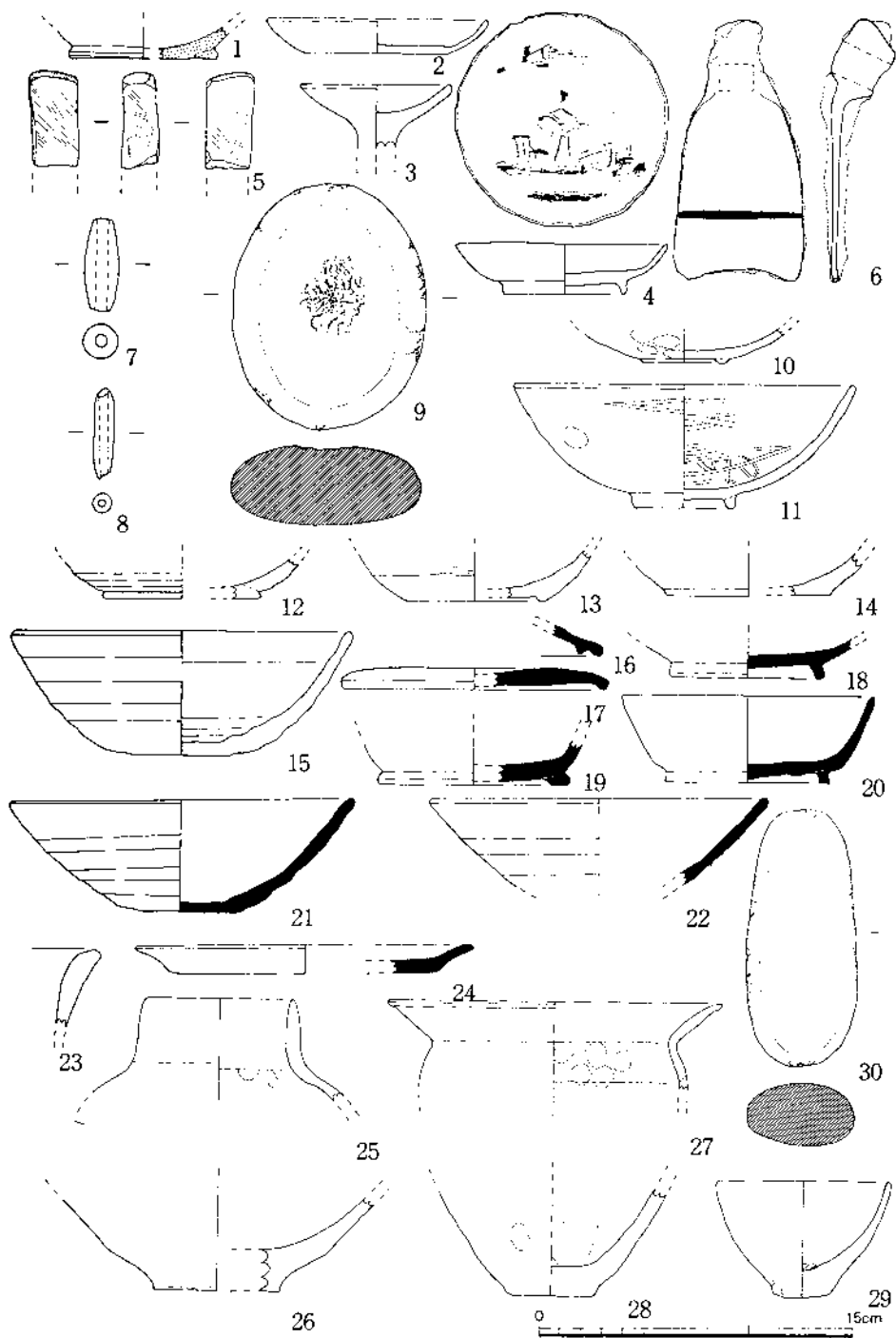


Fig18. 西ノ芝遺跡 (SK2・1~6)、王子遺跡出土遺物SD1 (7~9)
SD2 (10~22・30)・SD3 (23・24)・SD4 (25~29)

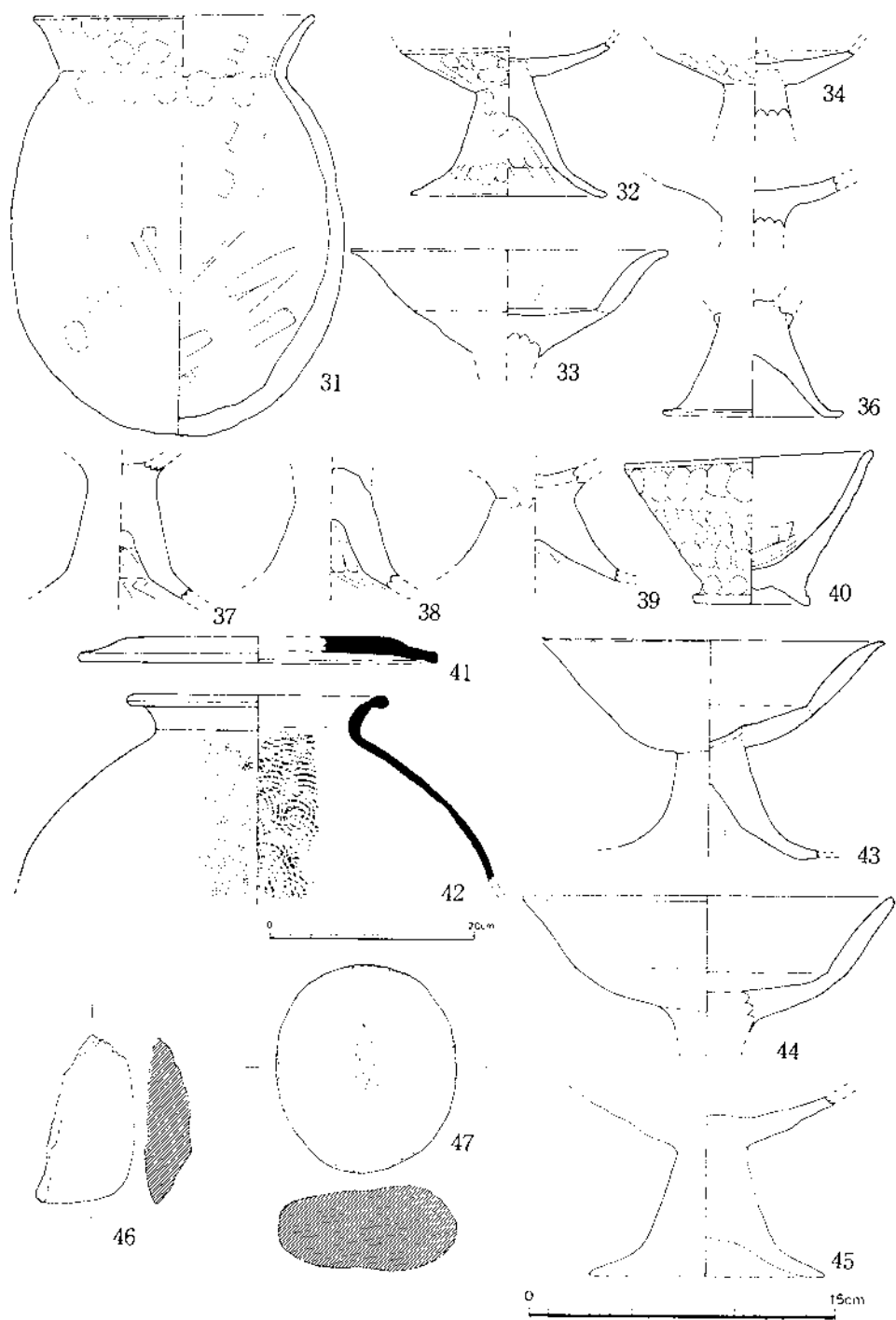


Fig19. 王子遺跡出土遺物 SD 3 (41・42) ・SD 4 (31・40) ・SD 5 (46)

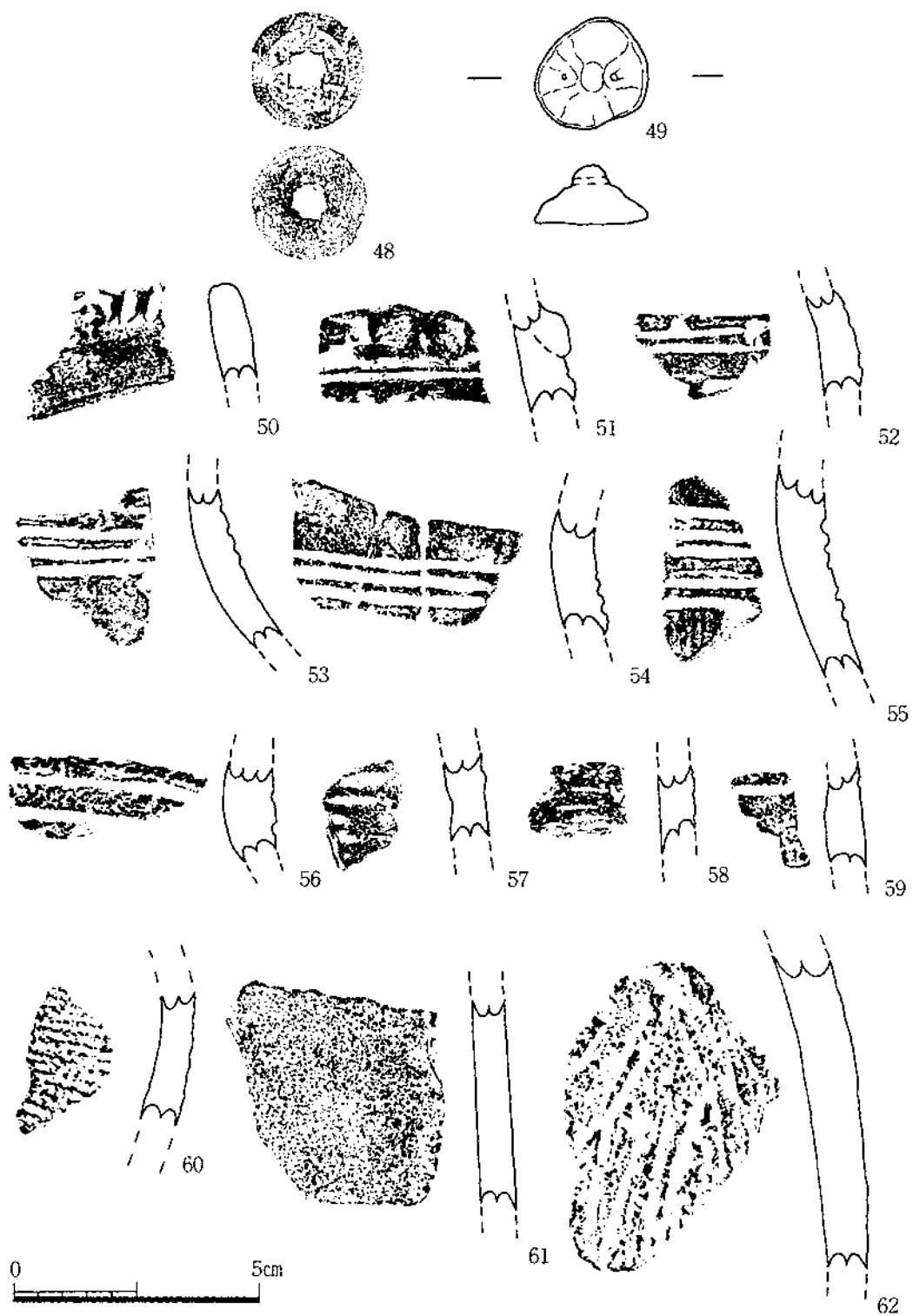


Fig20. 王子遺跡出土遺物 SD 1 (48・49)・SD 5 (50~59)・R 1 (60~62)

図

版



試掘調査風景 (TR 2・東から)



試掘調査風景 (TR 7・南から)



試掘調査風景 (TR13・北東から)



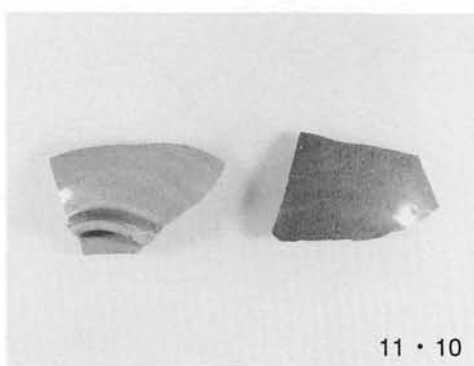
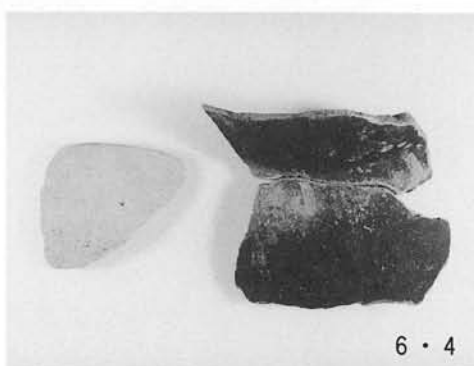
TR13遺物出土状況 (古式土師器・北から)



試掘調査風景（TR19・南西から）



同 上（西から）



TR13 (1~7・9)・TR19 (10・11) 出土遺物



王子遺跡調査風景（南から）



同 上（予備調査）



調査風景 (西から)



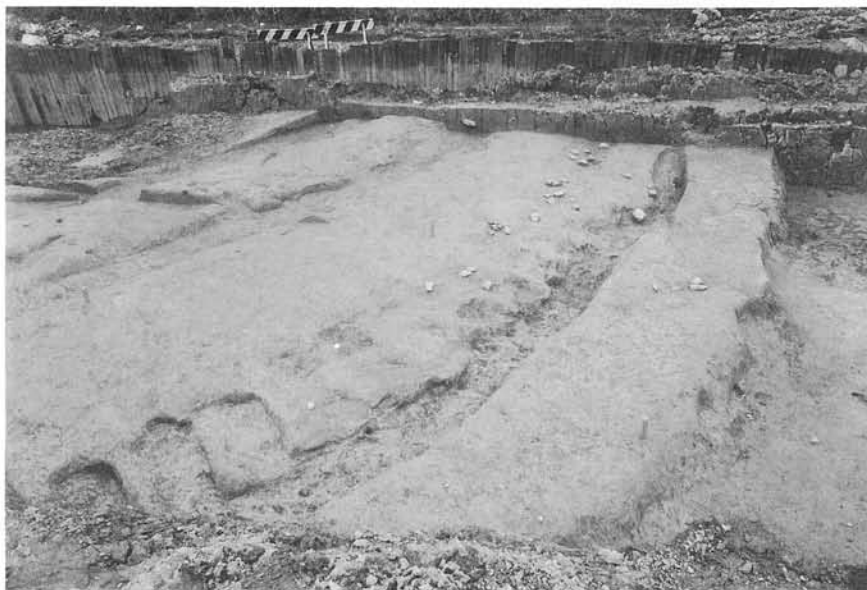
同 上 (南から)



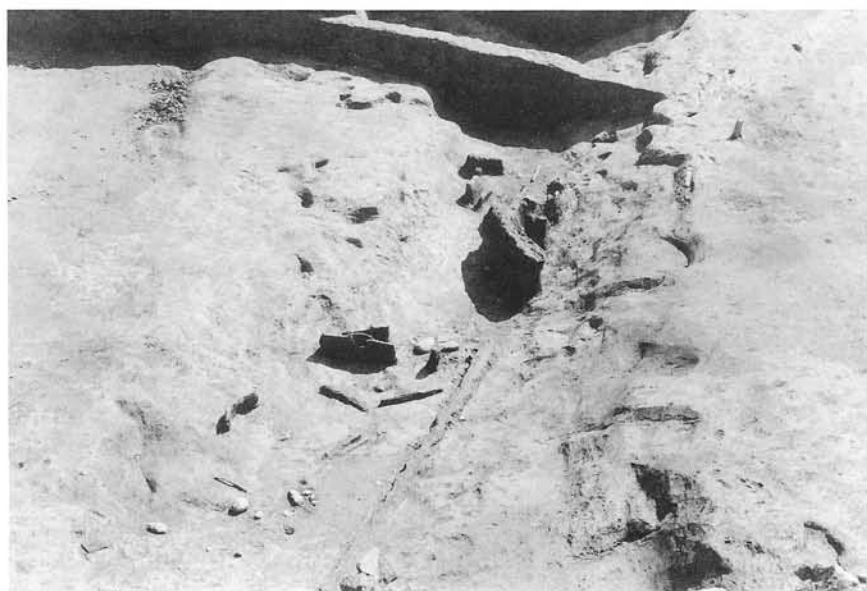
調査風景（北東から）



R 1 近景（北東から）



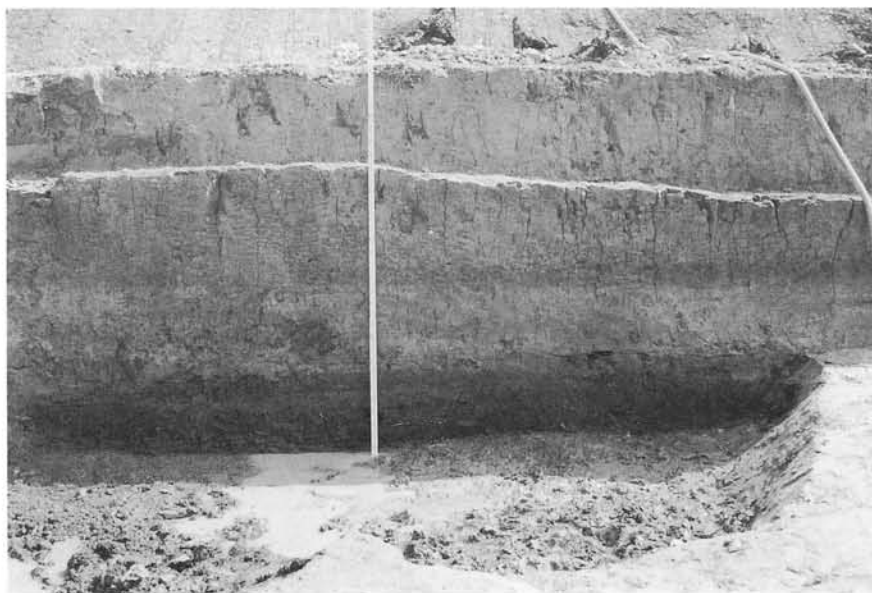
SD 1～4 検出状況（南東から）



SD 5 検出状況（北から）



SD 3・4 (南東から)



R 1 南 壁



発掘区全景（北東から）



完掘状況（北東から）



西ノ芝遺跡調査区遠景（北西から）



同 上（南から）



西ノ芝遺跡調査風景（南から）



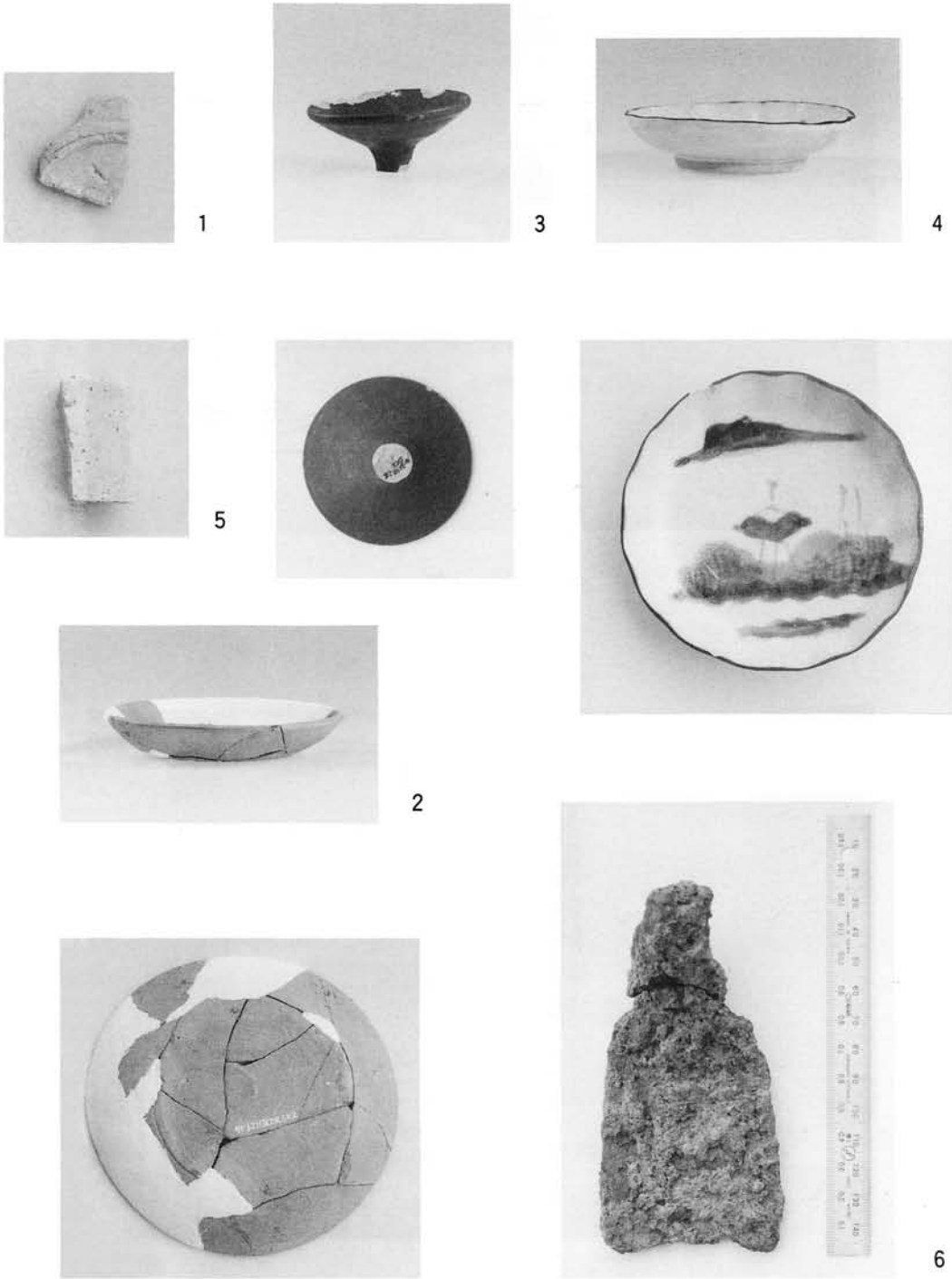
遺構検出状況（北西から）



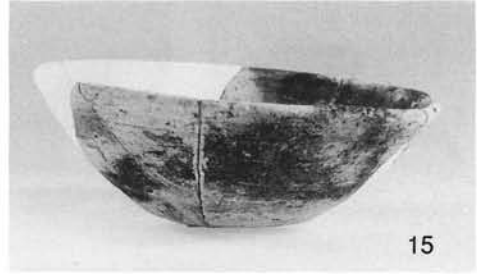
SK 3・4 (西から)



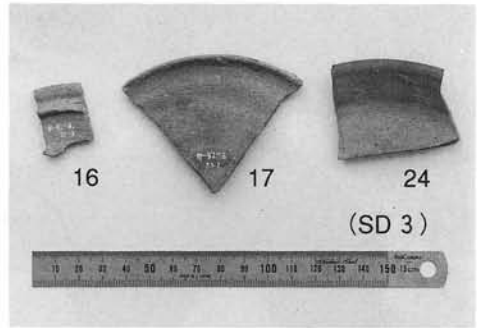
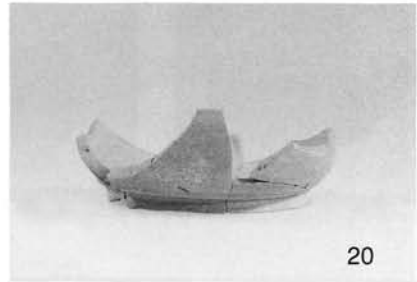
完掘状況(北西から)



西ノ芝遺跡出土遺物 (SK 2)

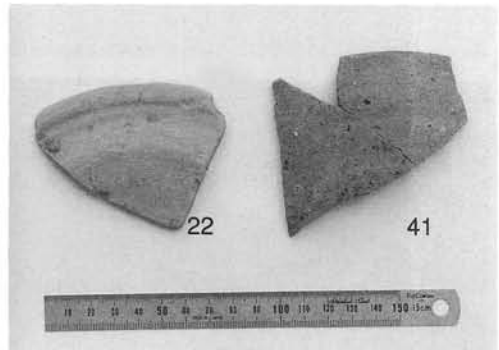
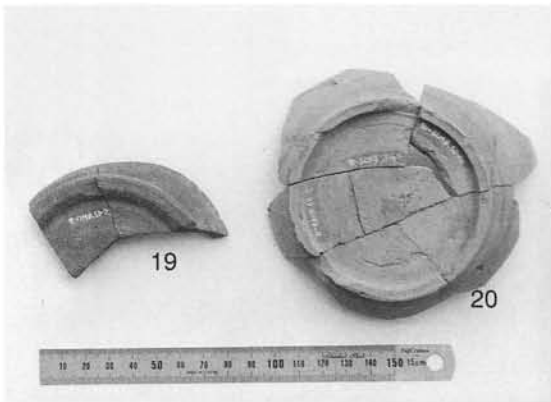


$\frac{1}{3}$



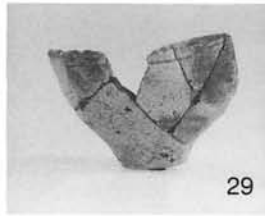
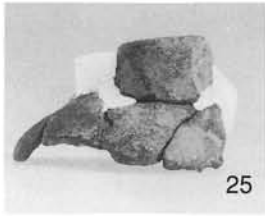
(SD 3)

(22・24・41を除いて他SD 2)

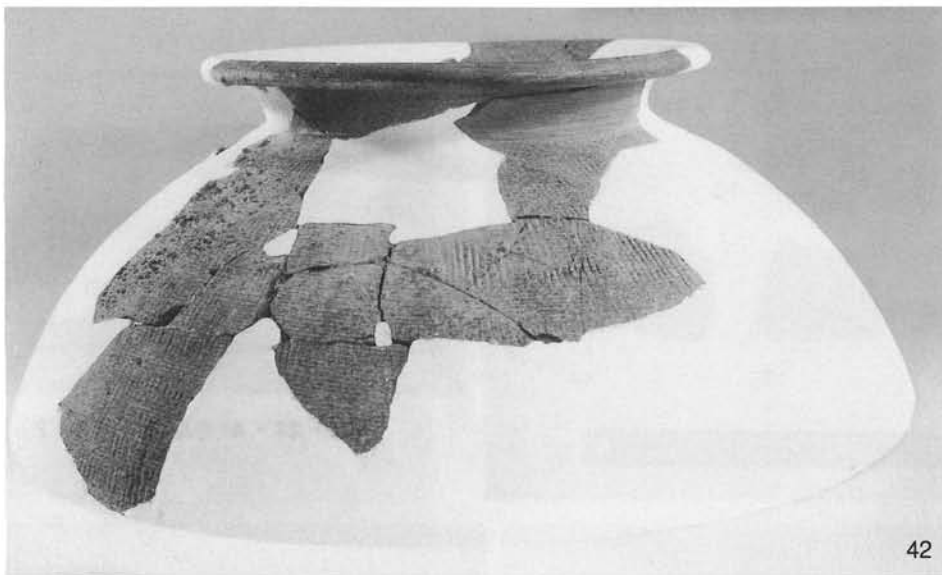
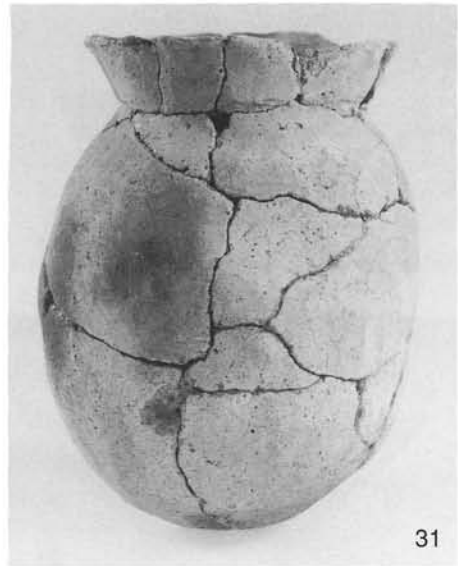


(SD 4 上層)

王子遺跡出土遺物 (SD 2～4)



(SD 4)



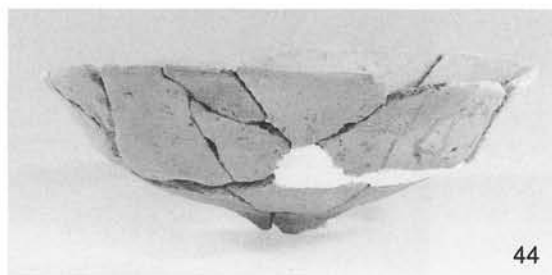
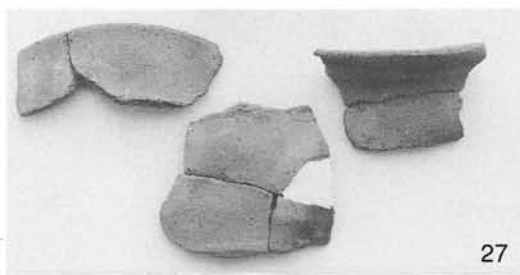
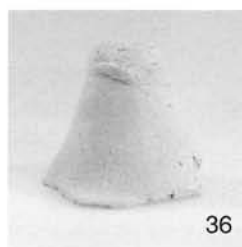
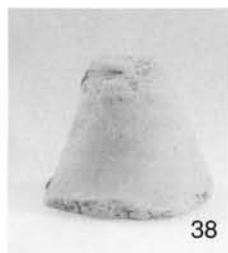
(SD 4
上層)



(SD 5)

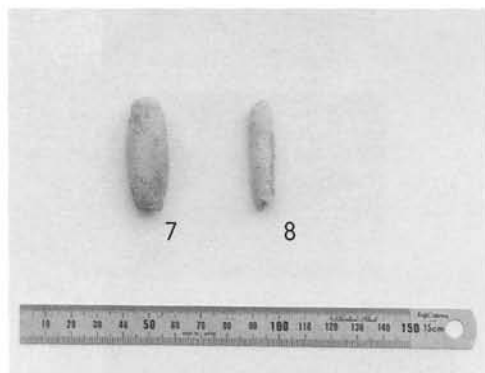


(SD 4)



王子遺跡出土遺物 (SD 4・5)

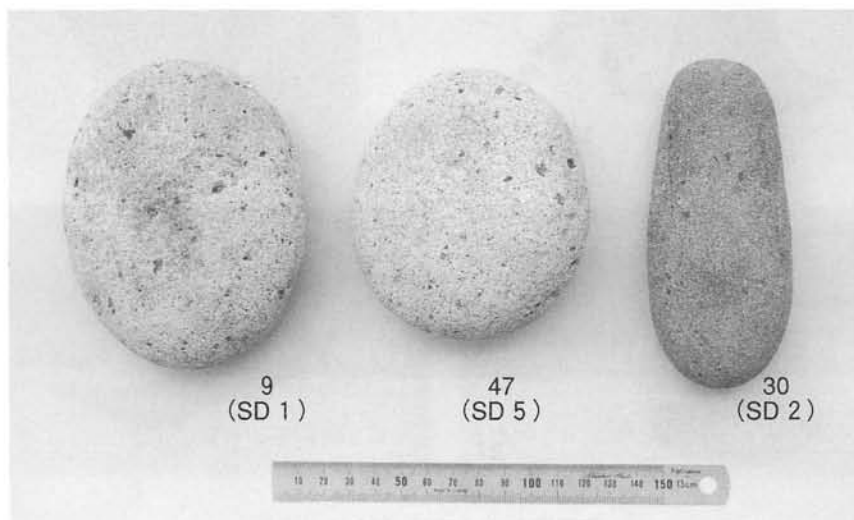
(SD 5)



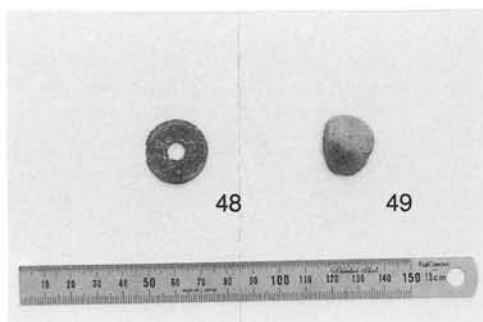
(SD 1)



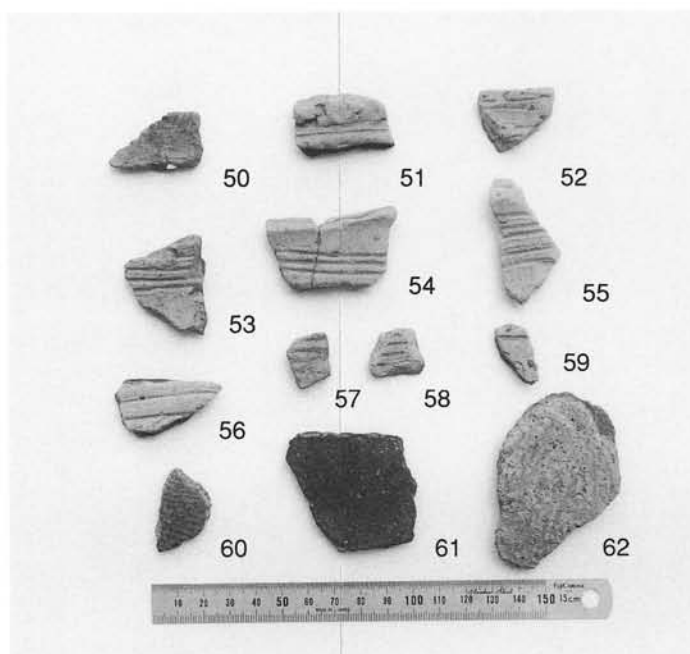
(SD 5)



王子遺跡出土遺物 (SD 1・2・5、R 1)



(SD 1)



(R 1)



(R 1)

王子遺跡出土遺物 (SD 1・R 1)